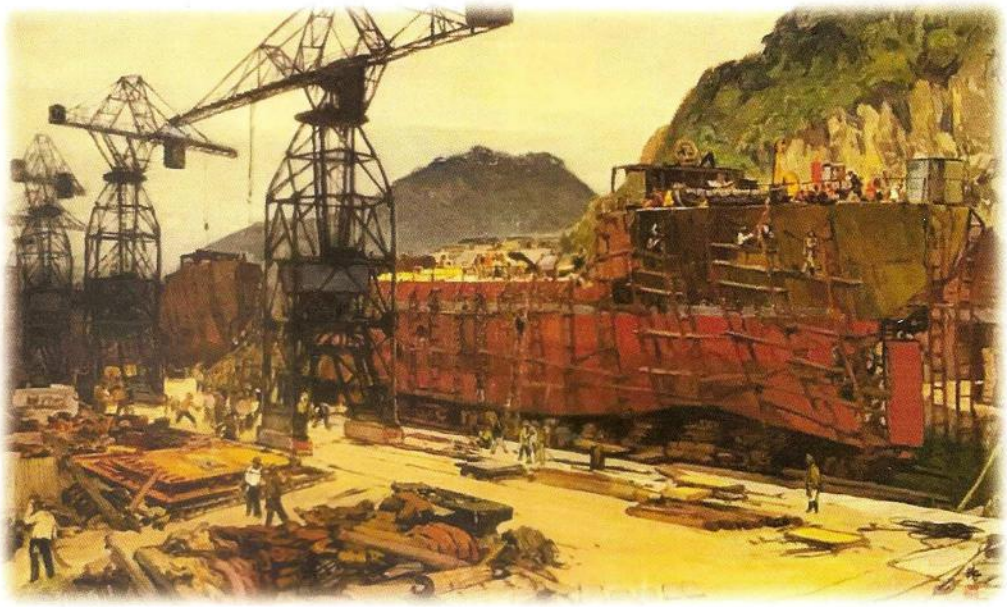
相生『吉田博展』その後

ー播磨における吉田博の足跡ー



「第７船台建造風景」油彩　㈱ＩＨＩ蔵

吉田博展実行委員会

本誌「相生　吉田博展その後」　編集に際して

平成２９年（２０１７年）秋、兵庫県相生市のＩＨＩ相生事業所や造船部門子会社ＪＭＵアムテックの倉庫にひっそりと眠っていた、戦時中の造船風景を描いた十数点の油彩画が、風景画の鬼才と称された吉田博の作と特定された。それを機に平成３０年６月下旬、ＩＨＩとアムテック両社主催で「吉田博展」を開催した（１、２頁参照）。「吉田博展」には当時の播磨造船所幹部の家族から数点の吉田博作の風景画の提供も受けた。更に展覧会後の発見があり、三十点弱の吉田博の未公開絵画を発掘することができた。

展覧会は成功裏に閉会したが、我々吉田博展実行委員会のメンバーには、展覧会の為にいろいろ検討したが未解決な事があり、また吉田博は戦時中この播磨の地で一体どういう足跡をとってきたのだろうという疑問があった。展覧会後、造船所に残された当時の建造線表や工場配置図、絵画中の山容や作業員の服装、吉田トラスト様から提供されたスケッチ帖等を参考にして、各絵画の作画場所や作画時期、絵画中の船舶や人物等の特定等に注力した。また姫路、家島、岡山県金光等で新たに発見された絵画の調査、熱海での吉田博スケッチ帖の調査、加古川の元陸軍飛行場関連の調査等も行った。

その結果、播磨造船所とその後継造船所に関わってきた者しか分らない事柄が多々発見された。従来、戦時中の吉田博の動静には謎が多かったが、各絵画の追跡調査により相生を中心とした吉田博の足跡がほぼ明らかになった。また、動員学徒の絵画については、同じ絵を造船所に残して動員学校へ寄贈した事例が２件、造船所には残っていないが動員学校が保存する事例が１件発掘できた。

これらを纏めた本誌は専門的な目でみると通常の美術関係誌とは異質な感を受けられるかもしれず、また「水辺の吉川」の吉川（よかわ）や加古川陸軍飛行場の件は、我々が時間的や地理的環境を勘案して結論付けた仮説に過ぎないが、美術史に就いては門外漢の造船技術者ＯＢ達の試みとして、参考として頂ければ幸いであります。

絵画の探索、展覧会の準備と実行、追跡調査、本誌の編集等で一年有半を費やしたが、有意義な時間であったと満足しております。

平成３１年３月３１日

吉田博展実行委員会

会長　石津　康二（昭和 33 年播磨造船所入社）

委員　山上　和政（昭和 43 年石川島播磨重工業入社）

　　荻　　俊秀（昭和 49 年石川島播磨重工業入社）

　　宮艸　真木（昭和 49 年石川島播磨重工業入社）

　　水野　昌芳（昭和 60 年石川島播磨重工業入社）

目次　兼　絵画リスト

	頁
本誌　「相生　吉田博展その後」　編集に際して	a
寄稿文	c
第１章　相生吉田博展の開催	1
１－１ 相生吉田博展開催の経緯	1
１－２ 吉田博展　フライヤー	3
１－３ 展覧会場写真	4
第２章　戦時下の播磨における吉田博	5
２－１ 播磨造船所と吉田博	5
２－２ 戦時下の吉田博の足跡(年譜)	6
２－３ 兵庫県及び相生市地図	7
２－４ 播磨造船所　工場配置図	8
２－５ 播磨造船所　建造線表	9
第３章　戦時下の増産体制と吉田博絵画　（第１期　昭和１７年秋～昭和１８年夏）	10

図番	分類	絵画タイトル	頁
①	造船所	第７船台建造風景	10
②	造船所	船台横作業風景-１	11
③	造船所	船台横作業風景-２	
④	造船所	油槽船建造　下絵	12
⑤	製鉄所	出銑	14
⑥	製鉄所	出鋼	

第４章　勤労動員学徒と吉田博絵画　（第２期　昭和１９年夏～昭和２０年５月）	15
播磨造船所の動員学徒受入れ状況	15

図番	分類	絵画タイトル	頁
⑦	学徒	姫中　学徒動員風景	16
⑧-a	学徒	表事務所事務作業	17
⑧-b	学徒		
⑨	学徒	炎天下の鉸鋲作業	19
⑩	学徒	鉄器工場孔明け作業	
⑪	学徒	電気盤組立作業	20
⑫	学徒	木工場焼印作業	21
⑬	造船所	第２船台建造風景	22
⑭	学徒	機械工場旋盤作業	23
⑮	学徒	ワイヤー先端処理作業	
⑯-a	学徒	組立場コーキング作業	24
⑯-b	学徒		
⑰	学徒	ハンマー・タガネ基礎訓練	26
⑱	学徒	シェーパー加工作業	
⑲	造船所	タービン減速機組立作業	27
⑳	肖像画	進水五百（流田職長像）	
㉑	学徒	やすり仕上げの女学生	28
㉒	風景画	家島　真浦港風景	29
㉓	風景画	水辺の吉川	30

第５章　吉田博の風景画	32

図番	分類	絵画タイトル	頁
㉔	風景画	渓谷	32
㉕	風景画	奔流	
㉖	風景画	雨後の穂高山	32

あとがき	33
謝辞　及び　参考文献	34
参考資料	35
参考-１ 展覧会新聞報道	37
参考-２ 吉田博スケッチ帖の経緯と熱海訪問	40
参考-３ 吉田博スケッチ帖	41
参考-４ 吉田博の見た播磨造船所(戦時中の播磨造船所変遷)	51

寄 稿 文

吉田亜世美氏
（吉田博御令孫）

2017年11月18日（土）13：00　「吉田博さまの作品が発見されました！」
第一報が兵庫県立美術館の出原学芸員から届いた。そこには12枚の画像が添付されており、これだけまとまった博の戦争画が70年余り保管されていたことに大変驚いた。
11月23日（木）20：42　山上和政氏からご挨拶のメールを頂いた。「12枚の絵をぜひ相生市で展覧会を開催して相生市民に見て頂きたいと谷口相生市長にお願いし明日相生市との最初の打ち合わせが行われます」発見の第一報からわずか5日後のメールには発見者としての熱すぎる思いと相生愛が込められていた。その後、怒涛のように押し寄せることとなる「吉田博展」実行委員(チーム アムテック・ＩＨＩ)のマニアック的な調査と行動が予感された。

博は時折、風景画家の巨匠と謳われるが、巨匠というより風景描写マニアと言う方が相応しいと思う時がある。例えば河原のスケッチ。鉛筆で石1個1個特徴を捉え丹念に何万個と描写し、さらに遠景の夥しい数の木々をも緻密に描き込んでいる。生涯何千枚もの鉛筆デッサンを描き、全てみっしり描かれた細密描写だ。
明治43年、34歳の頃から瀬戸内周辺に幾度となく写生旅行に出かけており、長閑な海景、入江、漁港を数多く描いている。

今回発見された播磨造船所を描いた絵は、65歳を過ぎ造船所と船舶を描くことにマニア魂が炸裂したとしか思えない。工場建屋の鉄骨、クレーンのパイプ、これほど無数の直線を描いた博の絵を後にも先にも見たことがない。甲板の板張り、スイッチがたくさん付いた機械、赤く燃え滾る炉、鉄を打つ轟音が充溢する中躍動する無数の工員、博は造船所内を駆け回り時にはクレーンのてっぺんまで登り隅から隅まで克明に描いている。おそらく過去訪れた瀬戸内の穏やかな景色とは一変した猛烈な光景に興奮し、描く手が止まらなかったに違いない。

それらの絵の解明に向けチーム アムテック・ＩＨＩは俄然情熱を発揮した。調査誌を発行するまでの1年余りの尽力と功績に尊敬と感謝の念を表する思いである。
相生を訪問した折、石津康二、山上和政、荻俊秀、宮艸真木、水野昌芳の皆さまが輝く笑顔で出迎えてくださった。皆まるで博の戦友であるかのように当時の造船所について熱い談義は夜更けまで留まることがなかった。博がここにいたら、マニア同士さぞ話に花が咲いたことだろうと思いを馳せた。1年余りの追跡調査の結集が本となり後世に伝えられること、博はなんと幸せなのだろう。

2019年3月8日
吉田亜世美

安永幸一氏
（元福岡市美術館副館長）

突然、明らかになった吉田博の戦時中の活動

私が初めて「吉田博年譜」なるのを書き起こした昭和５１年（１９７６年）当時、彼の詳しい経歴を知っている者は誰一人おらず、私は必死になって当時のあらゆる古い美術雑誌や新聞記事、遺族の家に残された１００冊以上の写生帖や膨大な新聞切抜（特にアメリカ関連記事）などを頼りに、その足跡をたどったものである。以後、４０有余年、機会ある毎にその中身は厚みを増し、その経歴がかなり明らかになってきた。

しかし今日まで、どうしてもたどることが出来ない時代があった。それは昭和１６年（１９４１年）から昭和２０年（１９４５年）８月までの、いわゆる“戦時中”の約５年間である。私が作成した年譜の中では、この時代は幾つかの展覧会出品暦の他は、辛うじて昭和１８年（１９４３年）の項に「この頃、八幡製鉄所や広畑鉄工所、日本鋼管川崎製鉄所などで工場労働者の姿を描く」とあるのと、昭和１９年（１９４４年）の項に「この年から兵庫県相生造船所で勤労学生、生徒の姿を描き、関係各学校にその作品を寄贈する（昭和２０年春までこの仕事を続ける）」とあるだけである（自著「吉田博資料集―明治洋画新資料」）。

しかし、本文にあるように１２点の吉田博の油彩画が発見され、昨年（平成３０年）の夏、相生市文化会館で「吉田博展―相生に於ける吉田博画伯」が開催されて、１５００名を超える多くの入場者で賑わった。私も招待されて観覧した。さらにその有終の美として、石津康二氏を中心とする造船所ＯＢ達の並々ならぬ追跡調査が始まった。その結果としてこの度“相生「吉田博展」その後―播磨における吉田博の足跡”という記念すべき記録集が発行されることとなり、今まで永い間不明だった戦時中の吉田博の足跡と業績が明らかにされた。

私が今回の記録集を極めて高く評価するのは、この記録集が我々のような非理科系の美術史をやる者の手によって作成されたのではなく、造船所で技師として額に汗して働いておられた現場の方々の体験と、当時は軍事機密であった造船作業の実体が明瞭に語られ、作品の背景が裏づけされている点である。

さらに、勤労奉仕のために造船所に来た２０校以上で４２００名を超える勤労学生や女学生の足跡を訪ね、学校に残されていた数点の吉田博作品を発見されたのである。併せて吉田博の相生定宿も特定され、造船所での制作の余暇に、当時は最新鋭と云われた広畑製鉄所への訪問、更には昭和１０年（１９３５年）に木版画で発表した「吉川（よかわ）」の地を再訪し写生した可能性をも考察されている。これで戦時中の５年間の吉田博の足跡は、彼の他のどの時代の足跡よりも鮮明に浮び上がって来たのであり、まさに驚嘆に値する。

今回、私が特に感銘を受けたのは、「第７船台建造風景」という大作（８０×１３１ｃｍ）に描かれた現場の様子から、制作年を昭和１７年（１９４２年）秋頃と推定され、これにより吉田博の相生訪問の時期が判ることや、「油槽船建造下絵」に精密に描かれた船が、当時としては最大級のタンカー日本石油の「一心丸」で、この作品は昭和１８年（１９４３年）の8月中旬に描かれたものと判断されたあたりである。これなどは、とても我々“非理科系人間”にはできない考察であり、旧播磨造船所ＯＢ達諸氏の御努力にあらためて深く敬服する次第である。

出原 均氏
（兵庫県立美術館学芸員）

展覧会が繋ぐ吉田博

アジア・太平洋戦争時、播磨造船所にて吉田博が描いた一群の絵を解明するのにささやかながらお手伝いできたことは光栄に感じています。

きっかけは、2016 年に兵庫県立美術館で開催した 1940 年代展に彼のスケッチブックを出品したことです。1943 年の生産美術展に出品した《油槽船建造》（現在所在不明）のための画稿で、私は 2012 年に原爆の図丸木美術館の展覧会でその存在を知り、彼の年譜に記された相生の造船所での仕事に該当すると推測しました。戦時中の美術で兵庫に関係するものとしては貴重な例です。事前調査をする余裕がほとんどなかったのですが、だからこそ、これを県民に紹介すればなんらかの情報が得られるのではと期待しました。結果は山上和政氏が本文で記された通りです。描いた場所に多量の絵が保管されていたとは思いもよらず、上記展覧会への出品を逃したのは残念でしたが、種を蒔いた甲斐があったと大いに喜びました（註）。展覧会というものは、様々な関係者を結びつける媒介項であり、また、開催したら終わりではなく、そこから始まることも多々あります。今回の件はまさにその好例でした。

こうした展覧会の特性は、吉田博展を開催して、他から様々な情報提供を受けた実行委員会の方々も実感されたと思われます。しかし、なによりも造船の専門家としての眼と学芸員顔負けの熱意による調査があったからこそ、情報が集まったのだと思われます。戦時中の画家の活動がこれほど詳らかになったのは珍しいのではないでしょうか。調査と分析が凝縮された本報告書は今後、貴重な資料となるに違いありません。

近年、戦時中の美術家の活動については、多角的な観点で論じられるようになってきました。かつてのように戦争に関することすべてを否定するような態度は生産的とはいえません。もちろん、戦時中の活動には批判すべき点も多々あるとは思いますが、まずは、当時の活動がどのようなものであったのか、事実を明らかにし、それを踏まえて縦横に論じる必要があります。相生での事例は、したがって、今後、当時の美術を捉えようとする際に繰り返し参照されることでしょう。

文化遺産としての絵を今日まで残してきた IHI と JMU アムテック、その他の関係機関、関係者の努力に敬意を表するとともに、その大半の絵をご寄託いただいた兵庫県立美術館に身を置く者としては、絵を公開し、研究・調査をさらに進展させる責務を託されたのだと受け止めています。

註　この詳しい経緯については「吉田博の播磨造船所の絵の寄託について」（兵庫県立美術館季刊誌『ART RAMBLE』第 61 号）をご参照ください。

戦時中の播磨造船所幹部の家族から提供を受け、相生吉田博展に展示された作品

「上野公園」　40.0㎝×27.0㎝
昭和12年
木版画　個人蔵

播磨造船所変遷略記

明治40年（1907年）	播磨造船所	
昭和35年（1960年）	石川島播磨重工業（IHI）	
平成　2年（1990年）	→	IHIアムテック
平成19年（2007年）	株式会社IHI	
平成25年（2013年）		JMUアムテック

第１章 相生吉田博展の開催

１-１　相生吉田博展開催の経緯

１）アムテックにおける吉田博絵画の発見

平成２年（1990 年）ＩＨＩ造船部門であった相生第一工場が分社独立しＩＨＩアムテックとなった際、構内の鷲ノ巣にあった旧ＩＨＩ相生第一工場修理部事務所倉庫に１２点の油彩画が保管されており、これらをアムテックへ移管した。

初代社長の石津は、サイン等から旧播磨造船所設計部 OB の久我氏（進水記念絵葉書の作者）に相談し、また美術史辞典を調べた結果、吉田博なる画家が動員学徒を描いた作品であることを知った。
当時は今のようにネットが発達しておらずそれ以上のことは不明であった。粗末にならぬよう額縁を新調し一部は事務所ロビーに飾るなどしたが、その後 12 点はアムテック倉庫内に保管された。

２）吉田博絵画の再認識

平成 29 年（2017 年）にアムテック史料館で保存している造船関係資料（一般配置図、進水絵葉書、書籍類等）をデジタル化し船舶海洋工学会のホームページとリンクする一連の作業を推進（責任者第４代社長山上）した際、同年８月にデジタル化最終作業として 12 点の油彩画を撮影した。

同時期に、山上はネットで兵庫県立美術館が 2016 年９月発行した「アートランブル」VOL52 に出原均氏が「「1945 年±５年」展の風景画」なる一文を書かれているのを読み、吉田博画伯が相生の播磨造船所で油槽船のスケッチを描いた旨が記載されている事に驚くと共に、早速連絡をとり同年９月兵庫県立美術館にて出原氏に面会することが出来た。

出原氏は学徒動員した学校に吉田博の絵が残っていないか確認しようとしていた所で、12 点もの絵が本家本元のアムテックにあることに大変驚かれると共に、氏よりこれらの絵は大変貴重なものである事をご教示いただいた。将来のことを考えるとこれらの絵はこのままアムテックに保管するのではなく兵庫県立美術館で保管していただくのが最善と思いその旨相談した所、県立美術館への寄託という方法があることを教えていただき、一度地元の相生市民に展示した後、これらは寄託すべきと考えた。
また出原氏は吉田博のお孫様である吉田亜世美氏に連絡すると共に、吉田亜世美氏を紹介された。

一方、10 月に入り相生在住の画家舟丘恵凡氏に、これらの絵を見ていただいた際にも、大変貴重な絵でありこのまま放置すべきではなく、まず地元の相生にて展示会を開くよう進言していただいた。

３）吉田博絵画の追加発見

これに触発され同年 10月にＩＨＩ相生総務部宮艸は３点の吉田博の油彩画を発見した。そのうち１点は額の裏に「昭和 17 年９月 20」と書かれている。これらはアムテックの 12 点が動員学徒の労働風景を描いたものであるのに対し、造船所における船舶の増産風景を中心に描かれている。

翌年になり４月に吉田博展開催のフライヤーを相生市全戸に配布した折、播磨造船所幹部の家族から吉田博の絵画が保管されている旨連絡が有り、調べた結果合計６点の作品が所蔵されていることが分かり、これらも展示会に借用させていただくことができた。

一方、実行委員会メンバーの荻はネット検索を続け５月に入り姫路市の日ノ本学園にアムテック所蔵の絵の内の一枚とほぼ同一の絵が保管されていることを知り、訪問調査の結果これも借用させていただくこととなった。

4）吉田博展開催へ

今回発見された作品は、いずれも昭和 17 年から２０年にかけて描かれた油彩画で未発表であり、また吉田博の戦時中の作品はあまり残っていないことからも大変貴重なものであり、前述のように県立美術館へ寄託する前に多くの市民・県民に見て頂く為に地元相生市での展示会開催を平成 29 年 11 月に谷口相生市長に相談した。

谷口市長に心よく同意していただき、同年 12 月に相生市役所、ＩＨＩ、JMU アムテックの三者と OB である石津、山上のメンバーで吉田博展準備会を２回開催した。

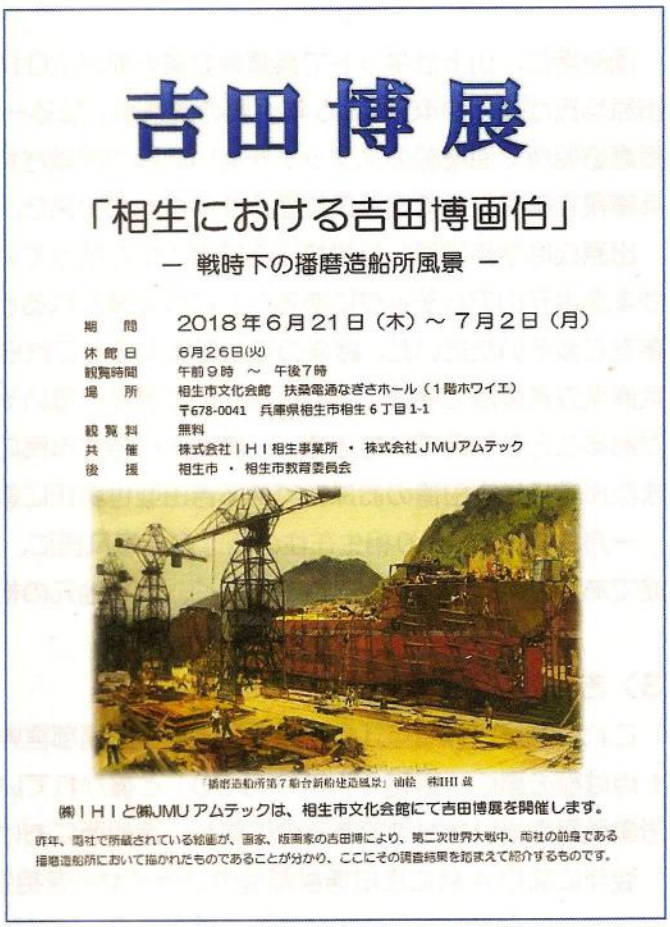
平成 30 年１月 12 日に相生市文化会館「扶桑電通なぎさホール」にて第１回吉田博展実行委員会を開催し、石津氏に実行委員会長をやっていただくことになった。また吉田博展はＩＨＩ、JMU アムテック２社の主催で相生市に後援していただく形で進めることになった。
開催場所や時期も「扶桑電通なぎさホール」にて、平成 30 年６月２１日から７月２日と決定した。

以降、月１回のペースで実行委員会を開催し、第一回時点では 15 点であった展示品も前述のように個人所蔵の作品提供申し出や、動員学徒の学校を調べて行く内に各所から展示作品が集まり個人・団体より貴重な油彩画５点と、版画３点も展示にご協力頂くことになり、併せて未発表の２０点を含めた２３点の作品が揃うこととなった。

また、３月には吉田亜世美氏に吉田博の相生での足跡がわかるものを展示したいが何かお持ちでないかご相談した所、ご多忙の中を１６０点以上のスケッチ帖の中から３点のスケッチ帖を相生のものではないかと画像データをお送り頂いた。

中を拝見するとまさしく播磨造船所でのスケッチが数多くあり驚くと共にこのハードコピーも展示させていただき好評を得た。

当初は１１日間の展示で1,０００人分の準備をしておけば十分と考えていたが、開催初日には吉田亜世美氏にも来場頂き、終わってみると短期間にもかかわらず1,５３９人もの方々に来場頂き、主催者として反響の大きさと、吉田博画伯の人気の高さをあらためて痛感した次第である。


吉田博展

「相生における吉田博画伯」

― 戦時下の播磨造船所風景 ―

期　間　2018年6月21日（木）～ 7月2日（月）
休館日　6月26日(火)
観覧時間　午前９時 ～ 午後7時
場　所　相生市文化会館　扶桑電通なぎさホール（１階ホワイエ）
〒678-0041　兵庫県相生市相生６丁目1-1
観覧料　無料
共　催　株式会社ＩＨＩ相生事業所 ・ 株式会社ＪMUアムテック
後　援　相生市 ・ 相生市教育委員会

「播磨造船所第７船台新船建造風景」油絵　㈱IHI 蔵

㈱ＩＨＩと㈱JMU アムテックは、相生市文化会館にて吉田博展を開催します。

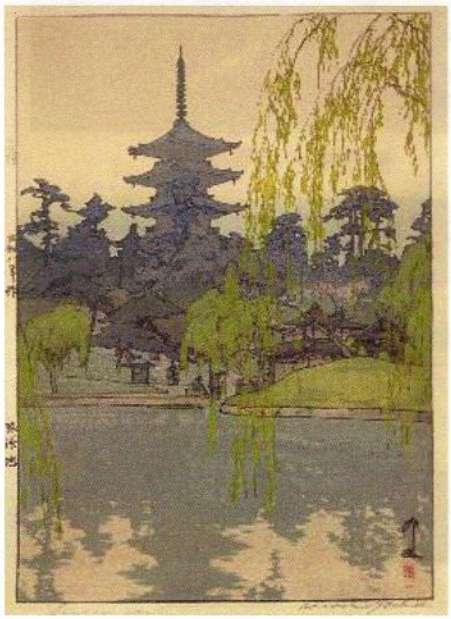
昨年、両社で所蔵されている絵画が、画家、版画家の吉田博により、第二次世界大戦中、両社の前身である播磨造船所において描かれたものであることが分かり、ここにその調査結果を踏まえて紹介するものです。

1-2 吉田博展フライヤー

吉田　博

〈吉田亜世美氏提供〉

氏　　名：　吉田 博（よしだ ひろし）
生年月日：　1876 年（明治９年）９月 19 日
出 身 地：　福岡県久留米市　旧久留米藩士・上田東秀之の次男として誕生。
死　　没：　1950 年（昭和 25 年）４月５日（満 73 歳）

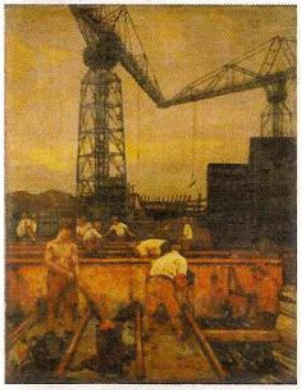


〈猿澤池〉〈画像提供:吉田博トラスト〉

1891 年（明治 24 年）15 歳、福岡県立修猷館の図画教師であった洋画家・吉田嘉三郎に 10 代半ばで画才を見込まれ、吉田家の養子となります。

上京して小山正太郎の洋画塾「不同舎」に入門し、仲間から絵の鬼と呼ばれるほど鍛錬を積み、1899 年（明治３２年）２３歳で、アメリカに渡り数々の作品展を開催。水彩画の技術と質の高さが絶賛されます。その後も欧米を中心に渡航を重ね、国内はもとより世界各地の風景を取材した油彩画、水彩画、木版画を発表、太平洋画会と官展を舞台に活動を続け、日本よりも欧米での知名度が高い画家でした。

自然をこよなく愛し、多彩な風景を描いた吉田は、毎年のように日本アルプスの山々に登るなどとりわけ高山を愛し題材とする山岳画家としても知られています。制作全体を貫く、自然への真摯な眼差しと確かな技量に支えられた叙情豊かな作品で、国内外の多くの人々を魅了し、明治、大正、昭和にかけて日本近代絵画史に大きな足跡を残しました。吉田の作品は、ケンジントン宮殿のダイアナ妃執務室の壁に２点の木版画（猿澤池（1933 年）、光る海 瀬戸内海集（1926 年））が掛けられています。



〈第６船台横炎天下の鋲打ち作業〉

播磨造船所(相生)との関わり

吉田は、戦時中の 1942 年(昭和１７年)と 1944 年(昭和１９年)（吉田６６歳～６８歳)に播磨造船所へ来所し、増産を続ける造船所の風景や勤労学徒動員の姿を絵画に残しています。今回の展示作品の内１２点は、1990 年(平成２年)に、JMU アムテック倉庫内で発見されましたが、作者不詳のまま保管していました。

2017 年(平成 29 年)８月に JMU アムテック史料館 WEB 化作業中に、「吉田博」の作品と特定され、さらに同年１０月に、ＩＨＩ相生総合事務所倉庫で、同画家の３点が確認されました。

〈遮断器用部品ヤスリ仕上げの女学生〉

今回発見された 15 点の作品は、いずれも油絵で貴重な資料であることから、当時の工場配置図で、場所を示しながら展示します。

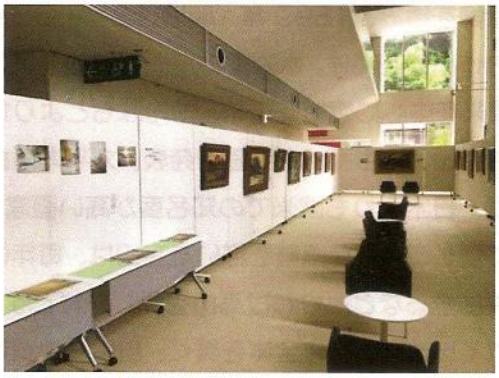
戦時中は軍事機密であったため、写真が残っておらず、著名な画家の未発表作品でもあり、相生市の時代背景を含め、造船の歴史文化等を後世へ伝えるために、相生市・相生市教育委員会の後援を得て、無料で一般公開することにしました。風景画家の第一人者と言われた吉田博の画力を通して当時の雰囲気を感じていただければ幸いです。

「吉田博展」実行委員会

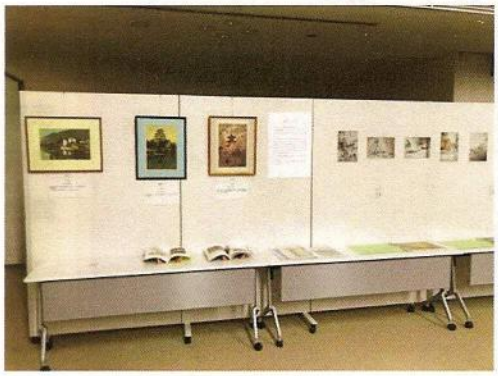
1-3 展覧会場写真

入口看板

開場前　西側風景



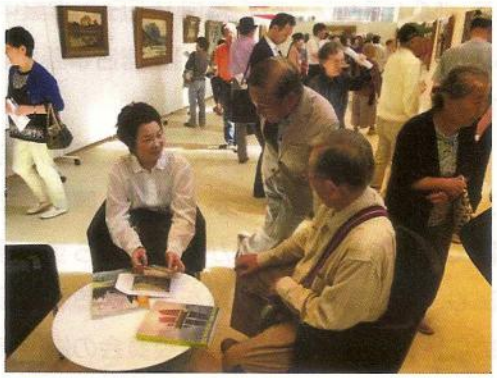
開場前　西側風景



開場前　東側風景

会場観覧風景

会場観覧風景



吉田博のお孫様 吉田亜世美氏と来場者の交流

谷口相生市長と吉田亜世美氏

来場者数　　相生市内１１９５人，　兵庫県内３１３人，　兵庫県外３１人，　合計１５３９人

第２章　戦時下の播磨における吉田博

2-1 播磨造船所と吉田博

風景画の大家であった吉田博は昭和１３年（1938 年）以降、陸軍従軍画家として中国大陸の戦場に赴き、多くの戦争画を残した。

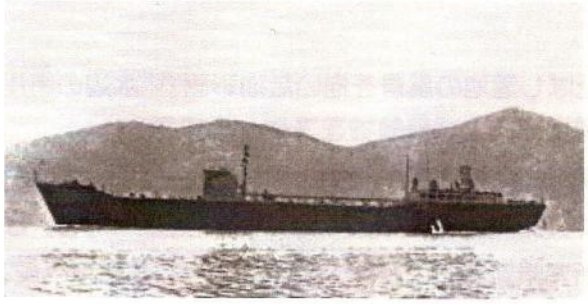
太平洋戦争勃発後は、戦時体制下で増産に励む製鉄所や造船所現場の絵画に専念した。昭和１７年(1942 年)秋から翌年にかけて、吉田博は相生の播磨造船所をたびたび訪れて作画し、その成果を翌年暮の生産美術展に出品した。播磨造船所を選んだ理由は、三菱や川崎のような海軍大型艦艇の建造が少なくて防諜上の問題も少なく、更には軍用特殊貨物船の建造を通じて吉田博の後ろ盾であった陸軍との関係が緊密であったのも一因かと思われる。

戦時下での船舶大増産に励む播磨造船所は、TL 型大型油槽船や、丁型海防艦その他の建造で繁忙を極めていた。更に昭和１８年(1943 年)初頭より海軍と共同で相生湾内に、小型改Ｅ型戦時標準油槽船の大量建造を目的とする「松の浦工場」の建設に着手し、４月頃には操業を開始した。吉田博はその後も昭和１９年夏から翌年にかけて播磨造船所を訪れ、勤労動員された学徒等を精力的に作画している。

吉田博の相生での活動は、第１期（昭和１７年～１８年）の随時来訪と、第２期(昭和１９年～２０年)の長期滞在に二分されるが、第１期の主題は戦時増産体制、第２期の主題は勤労学徒動員であった。

戦時下の播磨造船所と吉田博　年表(展覧会掲示資料)

年	月	日本政府	播磨造船所(本社工場)	進水実績		吉田画伯	年齢
				商船	艦艇	動　静	
昭和16年 1941	12月	太平洋戦争開戦	第３船渠(現２ドック)完成	11隻	6隻	木版画は、中国風景版画３点と日本風景版画４点、計７点を制作発表。 この年を最後に新作が途絶える。	65歳
昭和17年 1942	2月 6月	シンガポール陥落 ミッドウェー海戦	戦時標準船建造開始 (TL型油槽船、AT型貨物船) 5月 日の浦造機工場新設	13隻	5隻	9月頃　相生滞在 油絵で造船所風景作成。	66歳
昭和18年 1943	3月 6月	学徒戦時動員体制確立要綱	3月 海軍松の浦工場操業開始	12隻	4隻	生産美術展に 「油槽船建造」を出品。	67歳
昭和19年 1944	3月 10月	決戦非常措置要綱二基ズク学徒動員実施要綱	勤労動員学徒受入開始(中学・高女・専門学校)(最大4,200名程度) 軍需工場に指定される。	14隻	9隻	7月～　相生に滞在し、勤労学徒の就労風景作成。 11月25日(～12月15日)文部省戦時特別美術展に「溶鉱炉」を出品。	68歳
昭和20年 1945	3月 7月 8月	硫黄島玉砕 8月15日終戦	7月28日 工場空襲被爆死者39名 勤労動員学徒　解散	6隻	3隻	勤労学生・生徒の生徒を描き、関係学校にその作品を寄贈する。 6月頃　新潟県新津町に疎開。 9月頃　東京へ戻る。	69歳



２ＴＬ型　戦時標準油槽船

（積載重量 16,600ton、船長　148m）

丁型海防艦（船団護衛用）

（排水量　９００ton、船長　６５m）

2-2 戦時下の吉田博の足跡（年譜）

我々の検討の結果、以下が播磨造船所及び播磨地方における吉田博の足跡と結論付けた。

1940 昭和15年 64歳　2月17日吉田博・佐々貴義雄聖戦従軍画展(高島屋）に71点出品。3月7日吉田博・佐々貴義雄・小野田元興聖戦従軍油絵展(大阪三越）に71点出品。3月8日第36回太平洋画展に3点出品。陸軍省嘱託従軍画家として中国に派遣される。

1941 昭和16年 65歳　2月15日第37回太平洋画展に出品。10月16日第四回新文展に「急降下爆撃」を出品。この年を最後に木版画の制作を中断。12月7日太平洋戦争始まる。

1942 昭和17年 66歳　2月14日第38回太平洋画展に「ペナンの回教寺院」など15点を発表。秋、播磨造船所にて①「第7船台建造風景」（IHI蔵）を制作。冬にかけて②「船台横作業風景-1」（IHI蔵）③「船台横作業風景-2」（播磨造船幹部家族所蔵）を制作。

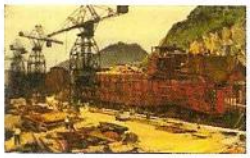
1943 昭和18年67歳　3月3日第39回太平洋画展に「ラホールの寺院」など3点を出品。この年の春、廣畑製鉄所にて油彩画⑤「出銑」⑥「出鋼」(個人蔵）を制作。5月25日　夢前会館にて生産美術展を開催。夏に播磨造船所にて④「油槽船建造下絵」を制作。冬にかけて油彩画に仕上げ、12月23日生産美術展に「油槽船建造」を出品。八幡製鉄所や広畑鉄工所、日本鋼管川崎工場などで工場勤労者や熔鉱炉を描く。

1944 昭和19年 68歳　2月5日第40回太平洋画展に「チトンの鉄砲」などを出品。播磨造船所にて7月以降動員学徒の姿を描き、油彩画⑦「姫中 学徒動員風景」(姫路西高等学校蔵)⑧「表事務所事務作業」⑨「炎天下の鉸鋲作業」⑩「鉄器工場孔明け作業」⑪「電気盤組立作業」⑫「木工場焼印作業」（JMUアムテック蔵）を描き、秋にかけて油彩画⑬「第2船台建造風景」(IHI蔵)⑭「機械工場旋盤作業」⑮「ワイヤー先端処理作業」⑯「組立場コーキング作業」⑰「ハンマー・タガネ基礎訓練」（JMUアムテック蔵）を描く。10月25日戦時特別文展に「熔鉱炉」出品。この年から兵庫県相生造船所で勤労学生・生徒の姿を描き、関係各学校にその作品を寄贈（昭和20年まで続ける）油彩画⑱「シェーパー加工作業」⑲「タービン減速機組作業」（JMUアムテック蔵)、スケッチ⑳「進水五百」を描く。この時期に家島にも足を延ばし、油彩画㉒「家島真浦港風景」(個人蔵)を地元に寄贈している。学徒動員した姫路中学(現姫路西高)、日の本高女（現日ノ本学園)、金光中学（現金光学園）にその作品を寄贈する。

1945 昭和20年 69歳　この時期吉川(よかわ)方面へ足を延ばし溜池の風景を描いた油彩画㉓「水辺の吉川(よかわ)」を制作。3月加古川飛行場にて九九式襲撃機をスケッチする。4月から5月にかけて播磨造船所にて油彩画㉑「やすり仕上げの女学生」(JMUアムテック)を制作。これを最後に吉田博は相生を離れ東京へ帰る。6月長男遠志の妻の里である新潟県新津町に疎開。終戦後9月ごろ東京へ戻る。

黒字部は安永幸一著「山と水の画家吉田博」の年譜から引用、青字部を本書にて追加した。

2-3　兵庫県及び相生市地図



旧播磨造船所

三木市吉川町

兵庫県

旧国鉄 播但線

旧国鉄 加古川線

加古川

美嚢川

相生市

姫路市

至る岡山

加古川市

旧国鉄 山陽本線

至る大阪

神戸市

家島諸島

淡路島

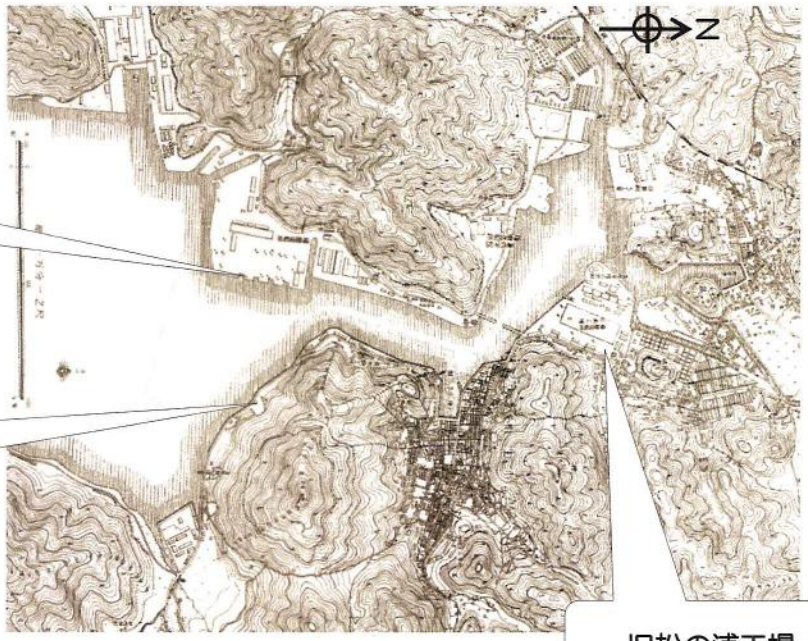
旧日鐵・廣畑製鐵所

旧加古川陸軍飛行場

真浦港

相生市播磨造船所地図

(戦時中の地図が入手困難なので戦後の地図を使用)



旧播磨造船所 本社工場

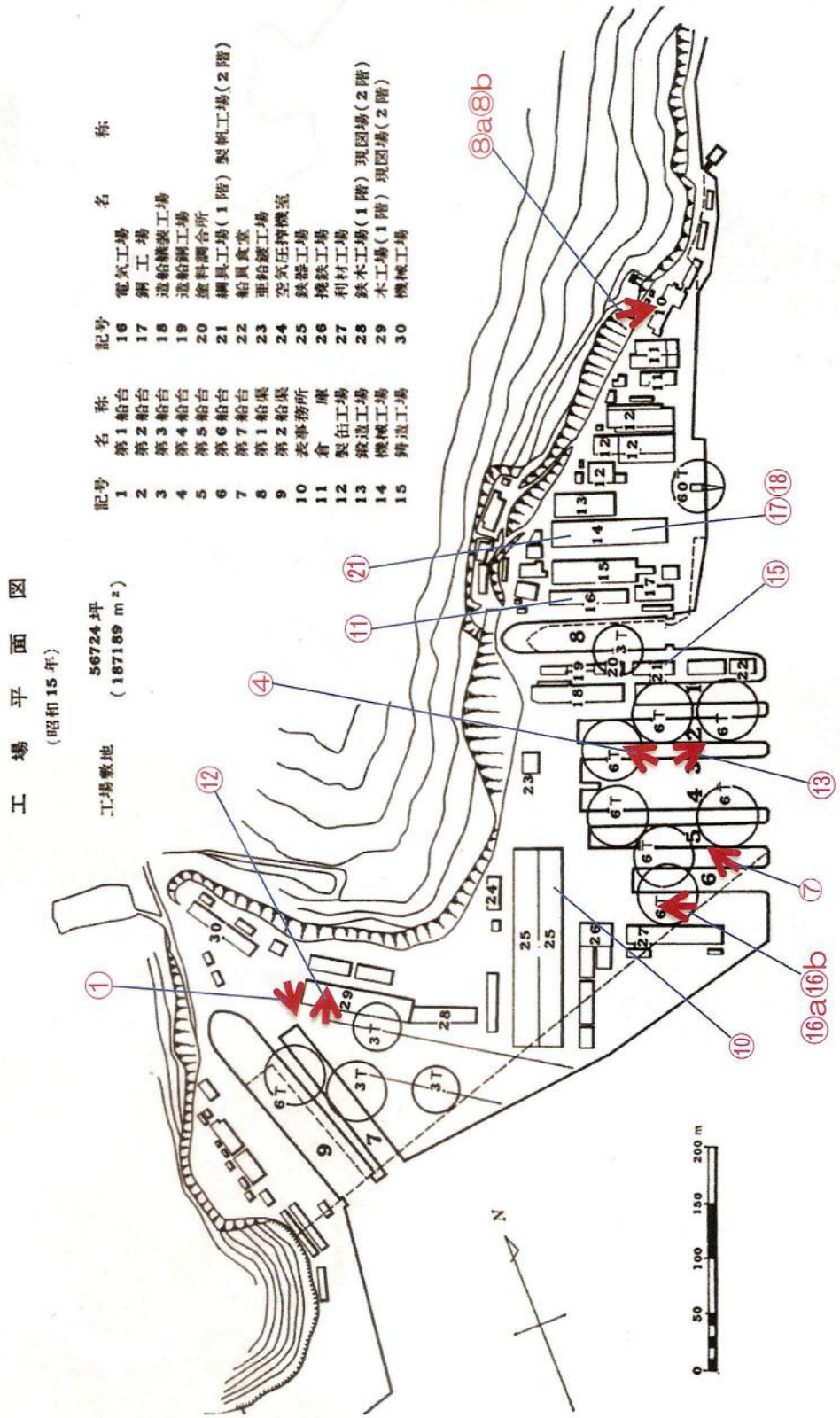
「水月別館」
吉田博が宿泊したであろう宿

旧松の浦工場

昭和２２年当時の相生市地図

2-4　播磨造船所　工場配置図

播磨造船所配置図　吉田画伯作画推定位置



矢印は、作画対象の場所と方向を示します。

2-5　播磨造船所　建造線表　（昭和１７～２０年）

凡例　K：起工　、L：進水　、（着色期間）：起工から進水　、D：竣工　、数字：日にち
赤字：油槽船　、黒字：貨物船・掃海艇等　、★★印：作画建造船特定

番船	船名	船種	総トン数	長さ	1942年（昭和17年）10	11	12	1943（昭和18）年 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1944（昭和19）年 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1945年（昭和20年）1	2	3	4
第1船台																																			
403	蟠龍	陸軍機動艇	780	59								L17		D																					
379	第七共榮丸	油槽船	1,160	64									K8		L17	D																			
394	竹島丸	曳船兼救難船	422	38											K20					L29		D													
第2船台																																			
335	にぎつ丸	特殊貨物船	9,528	144		L28				D																									
372	南邦丸	1TL型油槽船	10,033	153			K3					L14		D																					
373	一心丸	1TL型油槽船	10,044	153								K14			★L17		D																		
307	良榮丸	1TL型油槽船	10,017	153											K20				L21	D															
308	太榮丸	2TL型油槽船	9,930	148															K26			L18	D												
321	太邦丸	2TL型油槽船	10,045	148																		K20		L18	D										
322	宗像丸	2TL型油槽船	10,045	148																				K21			L6	D							
363	東城丸	2TL型油槽船	10,045	148																							K8				L6	D			
380	千曲丸	2TL型油槽船	9,951	150																											K8				L23
第3船台					← 船台廃止し組立場に変更																														
第4船台																																			
382	大鳥山丸	油槽船	5,281	121	K3					L21		D																							
342	隆榮丸	1TM型油槽船	5,142	120						K27				L5	D																				
343	あさしほ丸	1TM型油槽船	5,142	120										K8		L30		D																	
316	豊日丸	2AT型貨物船	6,436	128													K4		L19	D															
318	利川丸	2AT型貨物船	6,436	128														K22		L18	D														
341	天日丸	2AT型貨物船	6,933	128																K22	L20	D													
346	乾城丸	2AT型貨物船	6,933	128																	K22	L28	D												
347	永享丸	2AT型貨物船	6,949	128																		K30		L30		D									
348	山園丸	2AT型貨物船	6,949	128																				K3★	L22	D									
349	第16多聞丸	2AT型貨物船	6,886	128																					K24		L24	D							
357	第一大覇丸	2AT型貨物船	6,889	128																							K26		L14	D					
358	第一日産丸	2AT型貨物船	6,889	128																										K17		L15	D		
327	大楓丸	3TA型油槽船	7,251	128																												K18			
第5船台																																			
309	昭永丸	油槽船	2,764	93	L24		D	← 船台廃止し組立場に変更																											
第6船台																																			
383	第27号掃海艇	第十九号型	648	73					L23					D																					
345	あさなぎ丸	1TM型油槽船	5,142	120											K2			L30	D																
384	第39号掃海艇	第十九号型	648	73															K3		L24			D											
385	第130海防艦	丁型	740	70																	K		L24			D									
386	第132海防艦	丁型	740	70																		K		L25			D								
387	第134海防艦	丁型	740	70																			K25		L25		D								
388	第138海防艦	丁型	740	70																				K			L1	D							
389	第144海防艦	丁型	740	70																						K		L10	D						
390	第150海防艦	丁型	740	70																							K4		L15	D					
391	第154海防艦	丁型	740	70																								K12		L		D			
395	第156海防艦	丁型	740	70																									K18		L25		D		
396	第158海防艦	丁型	740	70																										K		L26			D
397	第160海防艦	丁型	740	70																											K27				L
新　第4船台																																			
356	靖江丸	2AT型貨物船	6,890	128																								K1			L15	D			
360	戸畑丸	3TA型油槽船	7,244	128																											K17				
第7船台																																			
371	風早	海軍給油艦	18,300	153		★	L20			D																									
362	神珠丸	貨物船	3,617	103		★			L10	D																									
405	速吸	海軍給油艦	18,300	153					K		【改造有り】							L25					D												
401	波勝	海軍標的艦	1,641	85					K			L27					D																		
319	修洋丸	2ARS型貨物船	6,933	128														K28		L6	D														
310	はりま丸	2TL型油槽船	10,045	148																K8		L31	D												
402	針尾	海軍給油艦	18,500	153																				K2				L4		D					
364	雄洋丸	2TL型油槽船	10,045	148																								K6			L10	D			

埋立、船台新設

←第4船台

←（名称変更）第1船台

←（名称変更）第2船台

←（名称変更）第3船台

←（名称変更）第5船台

④油槽船建造 下絵 作画船

1TL、2TL型連続建造

⑦姫中 学徒動員風景 作画船

1TM、2AT型連続建造

海防艦連続建造

①第7船台建造風景 作画船

海軍特殊給油艦、2TL建造

第３章　戦時下の増産体制と吉田博絵画　(第１期　昭和１７年秋～１８年夏)

①第７船台建造風景

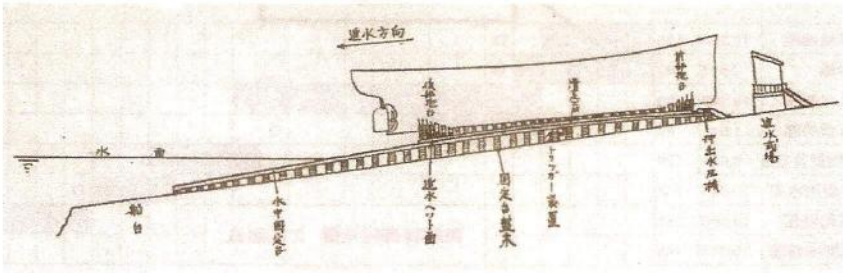
80.0 ㎝×131.0 ㎝
昭和 17 年秋　油彩キャンバス
㈱IHI 相生事業所蔵

この絵画はＩＨＩ相生総合事務所内の書庫から発見されたもので、展示絵画の中で最大のものである。吉田博の複数のスケッチ帖に部分スケッチが残されており、時間をかけて作画されたと推測する。
絵画の背景の山容から、作画場所は工場配置図（８頁）の第７船台、当時の建造線表(９頁)を参照して海側船（左側）は３７１番船、海軍給油艦「風早」(積載重量 14,500Ton)、山側船（右側）は３６２番船、栗林汽船貨物船「神珠丸」(積載重量 4,700Ton)の後部船体である。作画時期は昭和１７年(1942)年秋頃かと特定される。

「風早」進水後に「神珠丸」の前部船体を搭載完成させたものと考える。

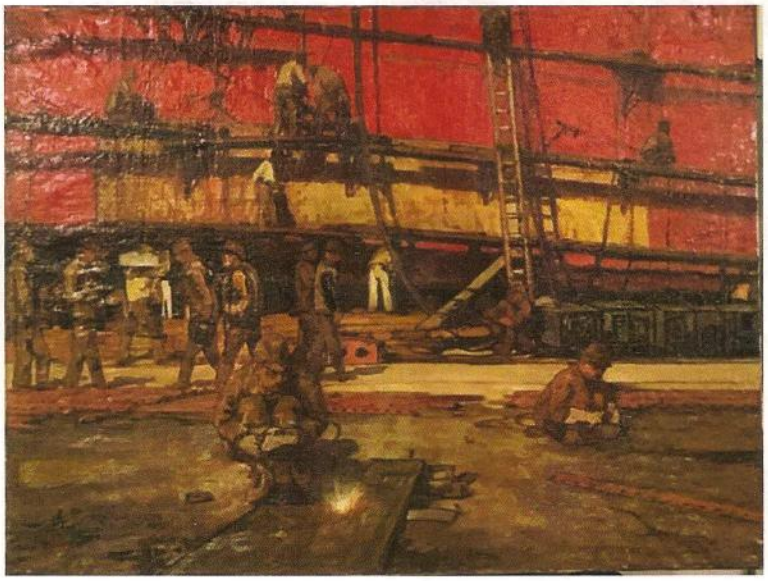
船台上の船体据付け

建造時の船体の据付け方法は進水技術の観点から下図のように船尾が海側になるのが一般的であるが、「神珠丸」は逆に据付けている。小型船故に進水工事上の不利を無視し、機関室の工事を先行して、工事短縮を図ったのかもしれない。



通常の船体据付要領

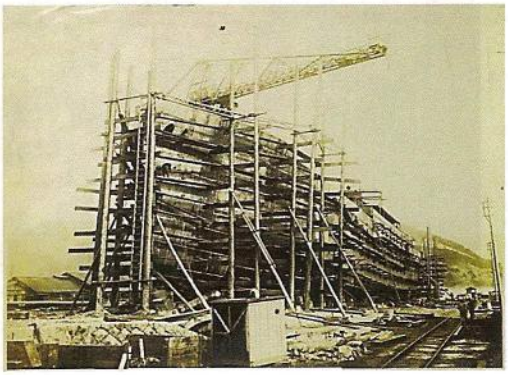
② 船台横作業風景-1



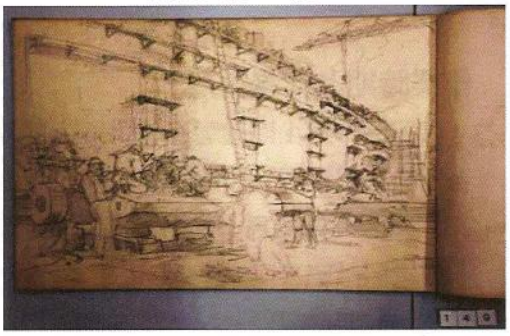
60.0 ㎝× 81.0 ㎝
昭和 17 年秋～冬　油彩キャンバス
㈱IHI 相生事業所蔵

舷側の足場

造船所で最初に吉田博が注目したのは舷側足場（船の外板外側に懸かる足場）上の作業であった様で、スケッチ帖を含め克明に描いている。

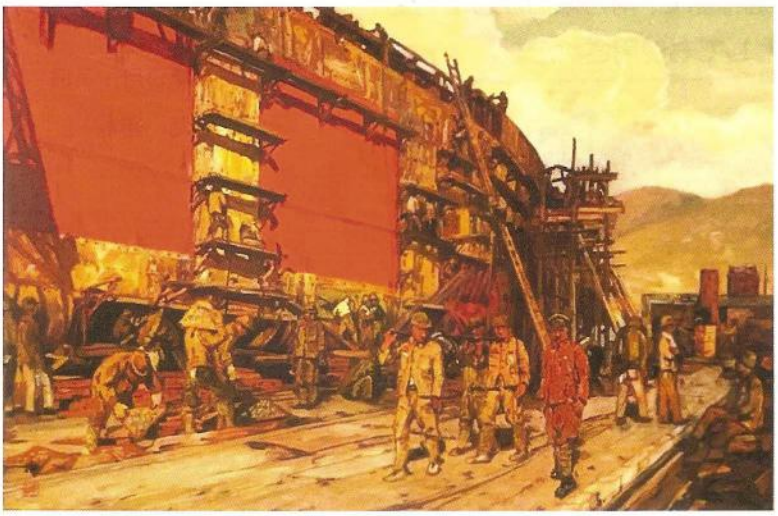


舷側足場の一例



スケッチ帖 No.149

③ 船台横作業風景-2



60．5cm×91．0cm
昭和 17 年秋～冬　油彩キャンバス
個人蔵

保存状態　最良の絵画

この絵は当時の播磨造船所幹部家族から提供されたが、今回発見された中で最も保存状態がよく、青空のグラデーションなど絵具の発色も鮮やかで、７７年前に描かれたとは思われない状態である。持ち主としては、部屋に飾る様な風景画ではないので、倉庫の奥に長く保管していたのが幸いしたかと思われる。右端に憲兵らしき人物が描かれている。当時は軍事機密の防諜上の目的で、軍需工場には憲兵が配置されており、吉田博の作画位置も干渉を受けたそうである。

④ 油 槽 船 建 造　　下 絵

生産美術展出品作の下絵
スケッチ帖 No.146 より
昭和 18 年８月

スケッチ帖 No.146に
ある同様のスケッチ

TL 型油槽船「一心丸」10,044 総トン

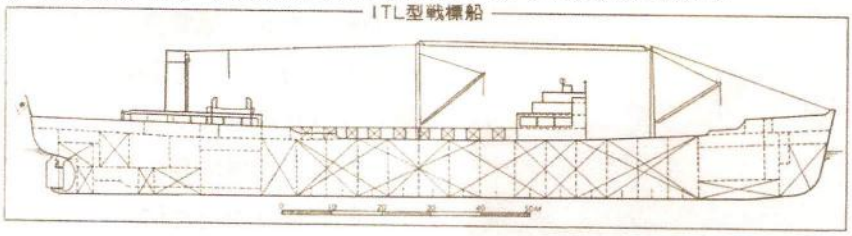
昭和１８年9月１７日
一心丸　進水

作業時期と作業場所

吉田博の第１期播磨造船所来訪時の集大成を成す絵画である。
当時の工場配置図や建造線表を参照し、場所は第２船台、昭和１８年（1943 年）８月中旬頃の作画と特定出来た。

対象船は第３７３番船、日本石油の「一心丸」（１ＴＬ型戦時標準油槽船）で、クレーン上から描いている（次頁参照）。

１ＴＬ型戦時標準油槽船(載貨重量 15,000t、船長 153m、速力１９ノット)は当時としては最大で最高速の油槽船で、南方油田からの石油輸送が主務だが、艦隊随伴用の給油船としても使用された。



生産美術展に出品

吉田博は昭和１８年１２月開催の生産美術展に、このスケッチを油彩画に仕上げ、「油槽船建造」の題で出品した。国策としての船舶増産体制の確立を示したものである。油彩画は現在行方がわからない。

鉸鋲（こうびょう）百万

吉田博は同美術展に、同じく播磨造船所で作画した「鉸鋲百万」も出品したらしく、作品は行方不明だが絵葉書が残っている。

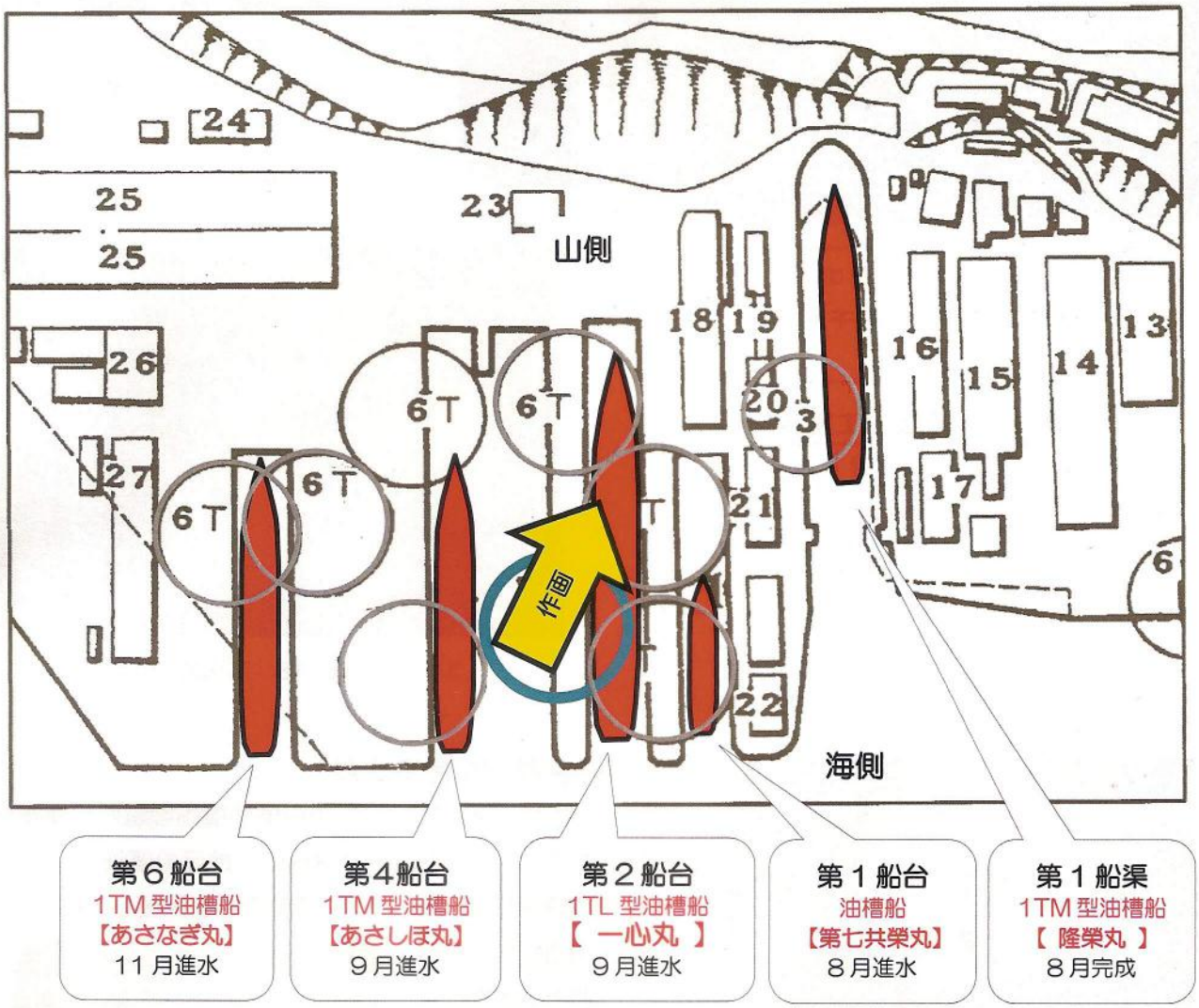
足場上の鉸鋲作業（リベット打ち）は、当時の造船現場の花形で、スケッチ帖 No.１４６には関連のスケッチが複数残っている。
鉸鋲百万とはリベット打ち作業の名人との意であろう。

スケッチ帖 No.146

「油槽船建造」作画位置

「油槽船建造」は下図に示す昭和１８年８月の播磨造船所工場配置図の第２船台左舷（山側に向かって左側）海側のクレーン（青着色○印）の上から描いている。この時の播磨造船所は他の船台でも大型油槽船を連続して建造しており、戦時中の船舶の大増産が軌道に乗った時期である。

＊図中の着色赤図形は建造船を、○円はクレーンを、黄矢印は作画方向を示す

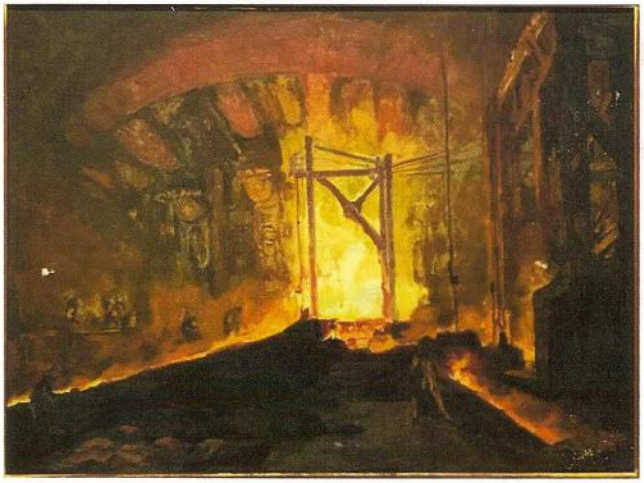


昭和２５年の建造写真

「油槽船建造」作画７年後(昭和25年)に建造された油槽船・日榮丸の記録写真がＩＨＩのアルバム保管室に残っており、ほぼ同じ構図となっている。

この写真を見ると、吉田博の描き方を意識して撮影されたのではと想像したくなる。

⑤ 出 銑



45.9 ㎝×61.0 ㎝
昭和１８年春　油彩キャンバス
個人蔵

日本製鐵廣畑製鐵所

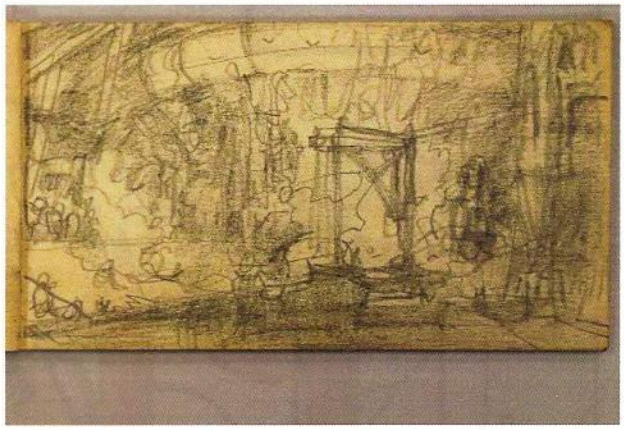
佐伯正夫氏（新日鐵ＯＢ）の紹介で当時の日本製鐵・廣畑製鐵所を描いた「出銑」と「出鋼」に出会った。

吉田博は昭和１７年～１８年に播磨造船所や廣畑製鐵所を、適宜往来して増産に励む工場の姿を描いた。

当時、播磨造船所への鋼板の供給は廣畑製鐵所が主で、毎月１万トン程度を供給していた。

播磨造船　月産加工重量

工　場	昭和18年実績	将来計画
本社工場	4，535T／月	6，500T／月
松の浦工場	3，960T／月	5，040T／月
合計	8，495T／月	11，540T／月



スケッチ帖 No.38　「出銑」の下絵

⑥ 出 鋼

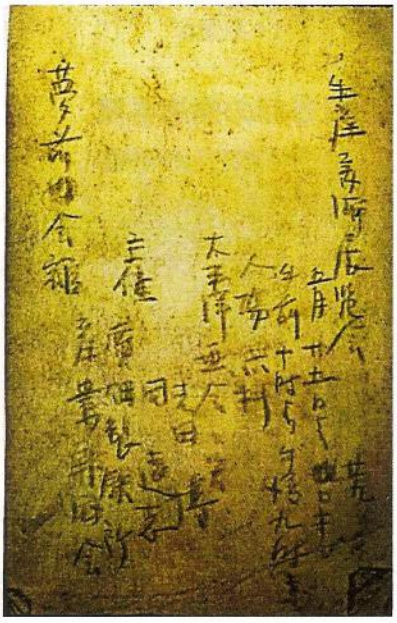
61.0 ㎝×45.9 ㎝
昭和１８年春　油彩キャンバス
個人蔵

廣畑 夢前会館で生産美術展

スケッチ帖 No.38 によれば、吉田博や廣畑製鐵所や産業報国会の主催で、５月２５日～２９日に、地元の廣畑(現姫路市広畑区)の夢前会館で生産美術展を開催している。

これらの絵画も出品後、地元に大切に保存されていたものと考える。

右のスケッチ帖の中には、吉田博の子息「遠志（とおし）」の名前も記載されている。



スケッチ帖 No.３８

第４章　勤労動員学徒と吉田博絵画　(第２期　昭和 19 年夏～20 年５月)

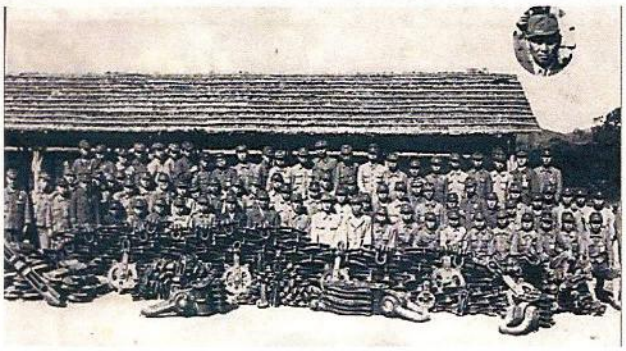
播磨造船所の動員学徒受入れ状況

太平洋戦争中、陸海軍の兵役の増加に伴う生産現場の人材不足を補う手段として、中学校以上の生徒や学生が軍需工場や食糧増産へ動員された。昭和１９年(1944 年)３月の**「決戦非常要綱二基ズク学徒動員実施要綱」**により、文部省は詳細な学徒動員基準を決定し、全国の中学校や高等女学校の３年生以上(１４歳～)は軍需工場へ通年動員された。

吉田博は陸軍省の委託により播磨造船所に派遣されて勤労動員学徒の姿を描き、派遣元の学校へ寄贈したとされていたが、今回、各校で３点の絵画が発見されて事実が証明された。

昭和１９年夏から昭和２０年５月の相生滞在中、吉田博は造船所の対岸にある迎賓館「水月別館」に滞在したと思われる。

取締役・造船部長の六岡は終戦後の学徒動員解散(昭和２０年８月)に当たり、各校毎に記念写真を撮影して配布したと云われる。



六岡造船部長と動員学徒 当時の龍野商業学校
(終戦時の解散記念写真)

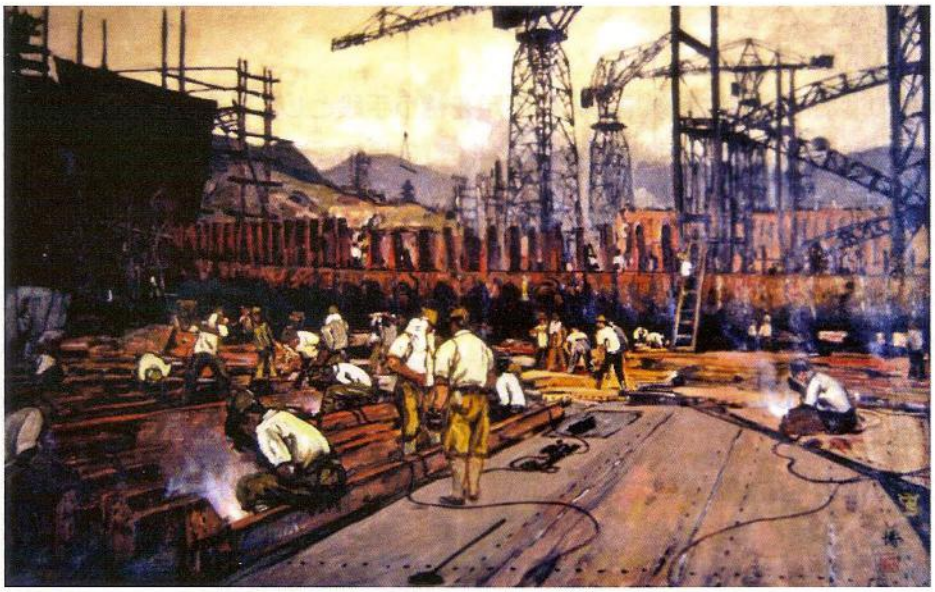
兵庫県、岡山県、和歌山県、京都府の各中学校、高等女学校より最大約4,２００人程度を受入れた。地元相生の学校以外は原則として全寮制とし、男子学徒用「興和寮」(収容能力2,６００人) 女子学徒用「大和寮」(収容能力１１２人)を建設したが、昭和１９年末頃には定員超過し、姫路や上郡からの自宅通勤も許可された。

学徒動員学校別人員表　(播磨造船所５０年史より)

学　校　名	入社年月日	人員	学　校　名	入社年月日	人員	
相生造船工業	昭和19年3月13日	221	金川中学	昭和19年7月18日	155	
相生青年学校	昭和19年3月13日	100	金光中学	〃	118	
※大学、高専	昭和19年5月30日	32	兵庫師範	昭和19年7月14日	224	462
姫路商業	昭和19年6月 3日	92		昭和20年7月 3日	36	
竜野商業	昭和19年6月12日	269		昭和20年7月12日	202	
姫路工業	〃	86	和歌山商業	昭和19年7月25日	334	
姫路中学	昭和19年6月26日	167	南海中学	〃	128	
竜野中学	〃	131	和歌山工業	〃	74	
福知山中学	昭和19年7月 4日	216	日高中学	〃	96	
大谷中学	〃	354	新宮中学	〃	109	
立命館第２中学	〃	324	耐久中学	〃	126	
日の本高女	昭和19年7月16日	83	相生高女	昭和20年6月 5日	103	
上郡高女	〃	104	甲陽工業専門	昭和20年7月 5日	79	119
関西中学	昭和19年7月18日	193		昭和20年5月21日	22	
矢掛中学	〃	102				
昭和１９年３月１３日～昭和２０年５月２１日まで　4,２８３人						

注：　※大学、高専学校名は東京帝大、九州帝大、日大、神戸高女、福井高専、日大専門部、宇部高専、山梨高専、横浜高専であった。
上記名簿には無いが、文部厚生軍需省の「学徒勤労令公布」により、国民学校高等科の動員があった。

⑦ 姫中　学徒動員風景



動員学校　姫路中学(当時)
57.0cm×89.0 ㎝
昭和１９年８月
油彩キャンバス
兵庫県立姫路西高等学校蔵

校章「曲り中」

この絵は、展覧会に来られた姫路日仏協会長の白井智子先生が「姫路中学の校章「曲り中」のある絵が無いですね」と言われたのをきっかけに見つかった。展覧会後、姫路西高等学校が学徒の絵画を所有すると聞き、白井先生共々訪問調査すると、吉田博の作として校史記念室の壁面に掲げてあった。昭和１９年８月作との記録もあり、学徒動員も始まったばかりか学徒たちの作業にも、吉田博の筆致にも緊張感があふれている。スケッチ帖 No.７５に作画予定のようなメモで「電気溶接。姫中・第二船台」とあり、背景の船舶は山下汽船の「山園丸」(２AT 型戦時標準貨物船)と思われる。

姫中第５６回生　井上生徒の勤労報国日誌

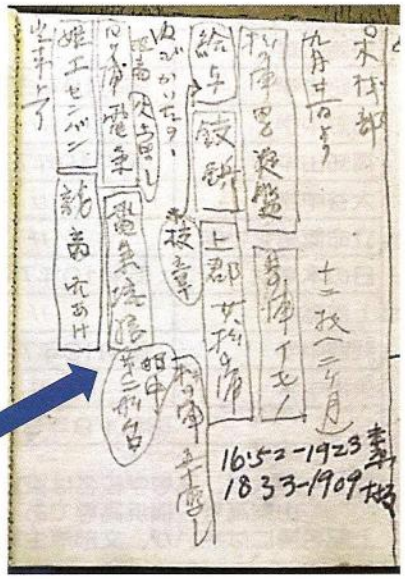
姫路中学学徒は昭和１９年６月２６日から翌年３月の卒業まで動員された。DVD に収められた姫中・姫路西高１００年史の中に、井上生徒の「勤労報国日誌」がある。毎日の克明な記録で(毎水曜日は英語で記述)、教師も検印し、明治１１年開校のエリート校の面目躍如である。

初日（昭和１９年６月２６日(月)）の記録は「緑したたる播磨灘に面する相生造船所に本日を以て入所せり(中略)。先ず当所に来ての感想は、戦場の痛々しい空気に工員全員がひたって、黙々と働いているのを見て、よくぞ来た、死んでもやり抜くぞとひしひしと感じた。」と意気軒高。

職場は鉄器班、取付班、電気溶接班、鋲鋲(こうびょう)班，填隙(てんげき)班、検査班に分かれ、井上が配属された填隙班は重労働であった。興和寮での食券偽装事件、学徒間のリンチ事件、集団赤痢事件と現実はきびしかったようである。１０月からは近隣の生徒は自宅通勤が許可され、井上も自宅通勤となり落ち着いたが、戦局はますます厳しくなり、造船所には激戦の後も生々しい破損艦船の修理入渠が相次いだ。

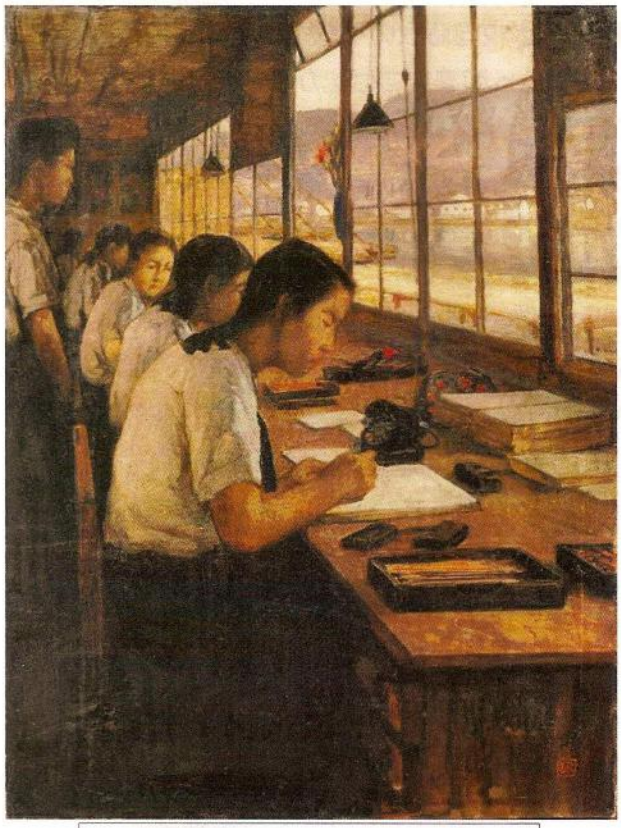
姫路西高等学校　校史記念室

白城会ＤＶＤ

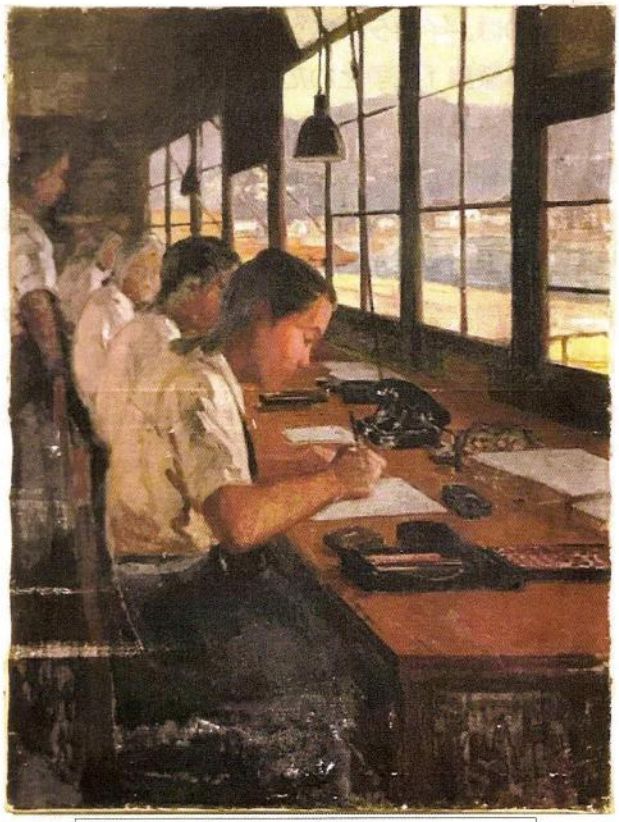


スケッチ帖 No.７５

⑧-a、⑧-b　表事務所事務作業



動員学校　日の本高女（当時）
81.0 ㎝×60.0 ㎝
昭和 19 年夏　油彩キャンバス
JMU アムテック蔵



動員学校　日の本高女（当時）
78.8 ㎝×59.0 ㎝
昭和 19 年夏　油彩キャンバス
日ノ本学園蔵

２枚とも播磨造船所の表事務所で働く女学徒４人と後ろで指導する女性が描かれ、窓の外には相生湾の海面と相生（おお）の町や山並みが見える。構図はほぼ同じだが細部に微妙な違いがあり、スケッチを基にして後にそれぞれの絵に仕上げたからで、どちらが先に描かれたかは不明である。

２枚の絵に描かれている少女達の表情の違いなどには、何か意図があるのだろうか。

２枚の絵の発見

この２枚の絵の左側は平成２年(1990年)に造船所内の倉庫で発見され保管されていた絵で、右側は今回の吉田博展の準備段階で「吉田博は各関係学校へ寄贈した」との年譜記載に基づいて探していたところ姫路の日ノ本学園高等学校で発見・確認された絵である。

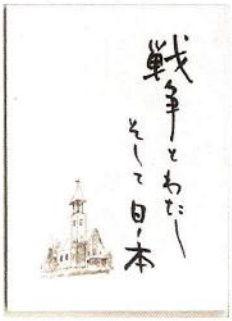
日ノ本学園の絵は昭和 43 年(1968 年)発行の創立 75 年記念誌に吉田博の名前入りで挿し絵として掲載されていたが、その後は作者が表示されないまま校舎の２階の廊下に飾られていた。今回の展覧会では２枚の絵が 70 数年ぶりに出会ったことになり、並べて掲示することができた。

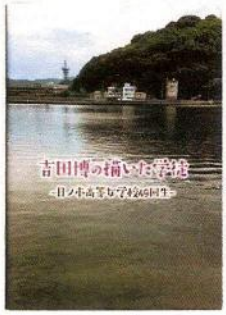
日ノ本学園高等学校　校舎廊下

学徒の事

この絵が日の本高等女学校（日の本高女、現日ノ本学園高等学校）の動員学徒を描いたものと確認できたのは、インターネット上の検索で、日ノ本学園高等学校同窓会の平成27年（2015年）発行の戦争体験集「戦争とわたしそして日ノ本」を基にしたweb版を見つけたからであった。web版には学徒による播磨造船所でのことが詳しく書かれており「仕事は事務仕事でした」「人事課に5人配属されました」等の記述があり、学徒の絵の構図に合致した。これをきっかけに日ノ本学園や同窓会、元同窓会長、更には元学徒の方に情報提供をお願いしたところ、貴重な情報が多く得られた。また、展覧会を機に学徒の方々の更なる体験談発掘をお願いしたところ、新たな体験談が複数寄せられ、これらは元同窓会長により文集「吉田博の描いた学徒」に纏められた。元学徒（日ノ本学園49回生）の方々は現在90数歳だが、職場での他校（上郡高等女学校）学徒との事、寮での食事の事、土曜日に姫路へ帰る汽車の事などが昨日のことの様に書かれている。展覧会には元学徒の方も来場された。

日の本高女の学徒は83名が昭和19年（1944年）から最大14ヶ月造船所で働いていたが、それぞれの人生で非常に大きな出来事であり、70数年経っても消えることのない体験と感じられる。





「戦争とわたしそして日ノ本」と「吉田博の描いた学徒」

女子学徒寮(大和寮・旭2丁目)にて　(学徒提供)

web版 52　2018年7月17日投稿

74年ぶりの播磨造船所

大前房子（49回生）

日ノ本女学校49回生の皆様、御免下さい。お久しゅうございます。

昭和20年日ノ本女学校卒業……、ここまで書きましたら頭の中は一杯になります。お互い、内外色々ありましたでしょうね。長い「その後」を経て、いかがお過ごしでしょう？　「お元気ですか?」のお尋ねの言葉もはばかれる気がします。何時も適当な言葉は？ と思うのですが……どなたか教えて（笑）。私は近頃よく忘れて難儀な生活を送っています。

さてこの度、皆様の元に主催者の荻様のお願いという書面とパンフレット、70回生の伊東様から届いたお手紙で、吉田画伯展のことは御承知と思います。場所が相生市ですので「近ければ」とお思いになられた方も多いと思います。どなたか行かれましたでしょうか。

私は家族に相生市文化会館へ連れて行ってもらいました。以前は阪神間の友達5、6名と時々集まったりしていましたが、昨今歩行が無理の方もあったりして御一緒できず残念でした。

相生では家族に頼んで皆勤橋の所だけ連れて行って貰うつもりでした。ところが荻様から御親切に思いもよりませぬ嬉しい時間をいただきました。

寮のあったあと地もご案内戴きびっくりでした。車から下り、寮に向かうあの坂道を一寸でも登りたくて3~4歩、歩きましたが駄目でした。昭和60年頃でしたかには、草ボウボウでしたが、寮の跡地を見る事ができました。今回は木が枝を延ばしていて駄目でした。それでも寮の場所など、荻さんよくおわかりになられましたこと、と感激でした。

左から実行委員の山上和政氏、石津康二氏、絵と対面する大前さん（中央）とご家族

荻様は、そこからあの皆勤橋のあったところに連れて行ってくださいました。

皆勤橋のあったあたり

皆勤橋のかかっていました岸壁対岸の造船所を眺めながら、本当に夢のようなひとときでした。岸壁の空き地に皆勤橋のあった標としてわりに新しいきれいな立札が立ててありました。

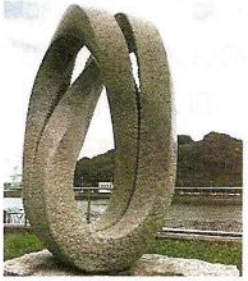
相生湾の東側にあった皆勤橋へ降りる道はコンクリートでかためられていた

海は穏やかで思わずミカン船を想い出しました。皆様の御記憶にもきっとあることと思います。本当に70余年のタイムトンネルでした。皆様と御一緒にあの場所に立ちたかったですね。

岸壁に沿って道路も出来、家も立ち並びすっかり変わっていました。

それから橋の無い分、西の方に廻って、造船所の衛門へ。特別に通行を許されて造船所の中へ入らせて頂きました。その後、造船所の中をあちこち連れて行って下さいました。

皆様のそれぞれのお仕事の場所は存じませんが、衛門すぐの私の仕事場だった当時しっかりと立派と思っていました「表玄関」と言われていました建物も、すっかり無く、衛門まで並木があって夏は涼しい木陰でしたが、それもなく、今は駐車場になっていました。

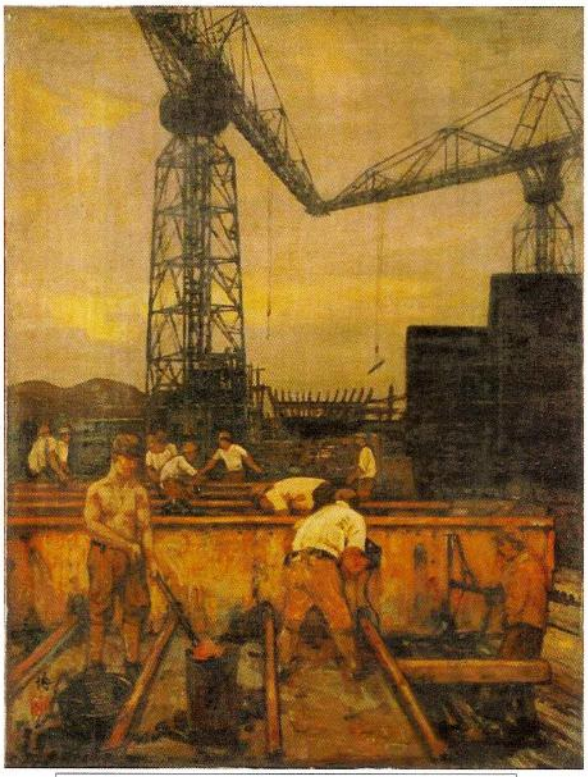


近くには牛尾俊三氏の作品も

時代の流れですね。

文集「吉田博の描いた学徒」の1ページ（2018年7月付けの元学徒文）

⑨ 炎天下の鋲鋲作業

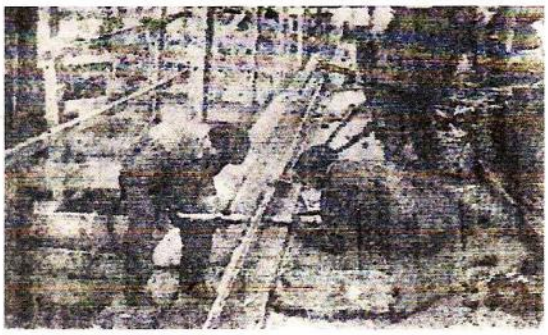


81.0 ㎝×60.0 ㎝
昭和 19 年夏　油彩キャンバス
JMU アムテック蔵

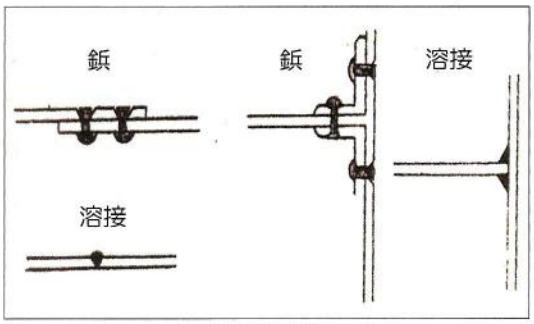
真夏の炎天下、屋外の鋲鋲作業を描いている。鋲鋲作業は、鋲（リベット）をコークス炉で灼熱した後、合わせた鋼板の鋲孔に差し込み、両側から空気ハンマーで締付ける作業で、熟練を要する重筋作業であった。このため未熟な学徒達には無理な作業であり、本絵画の作業者は学徒では無いと思える。

鋲継手と鋲鋲作業（鋲打ち、RIVETTING）

下図に鋲鋲作業の写真と鋲継手の構造図を示す。
戦時中、鋼板を接続する方法は鋲継手から溶接継手に移行する過渡期であったが、まだ鋲継手が主であった。



鋲鋲作業写真



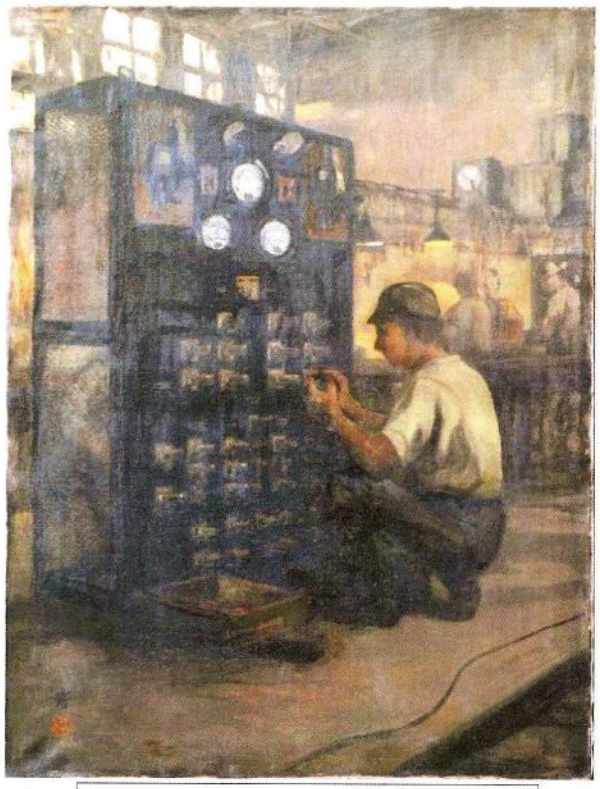
鋲継手と溶接継手

⑩ 鉄器工場孔明け作業

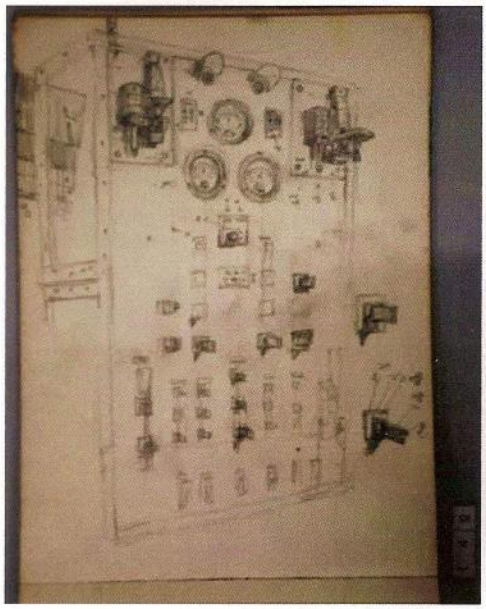
60.0 ㎝×81.0 ㎝
昭和 19 年夏頃　油彩キャンバス
JMU アムテック蔵

夏の鉄器工場で鋼板に鋲を差し込むための鋲孔の孔明け作業（DRILLING）を描いている。絵には校章が描かれていないが、スケッチ帖 No.７５に「龍商・穴明け」との記入があり、当時の竜野商業の学徒と推測する。屋内作業であり学徒達も助手として十分に役立ったと思える。

⑪ 電気盤組立作業



81.0 ㎝×60.0 ㎝
昭和 19 年夏　油彩キャンバス
JMU アムテック蔵



スケッチ帖 No.１４９

第１船渠の北側にあった電気工場において動員学徒が電気盤の組み立て作業を行っている。壁掛け時計の針は６時１０分前を指し、窓から斜陽が射し込んでおり夏の風景と想像される。当時の定時退場は４時３０分と思われるが、学徒も残業をしていたようだ。この当時、一般従業員の定時退場などは有名無実で深夜残業や徹夜作業が日常であった。

吉田博はこの電気制御盤の克明なスケッチをスケッチ帖 No.149 に残している。

動員学徒の事

播磨造船所に動員された学徒の入社年月や学年の一例を、資料から示すと、

動員学校	入社年月	学年（年令）
姫路中学	昭和 19 年　6 月	５年生（１６～１７才）
日の本高女	昭和 19 年　7 月	５年生（１６～１７才）
矢掛中学	昭和 19 年　7 月	４年生（１５～１６才）
相生国民学校	昭和 19 年 11 月	高等科１年生（１２～１３才）

となり、中学４・５年生に留まらず国民学校高等科１年生までも、軍需工場の中でも技能や安全が高く必要とされる造船所へ動員されていた。播磨造船所および全国の主要造船所では全労働者数に占める動員学徒の比率は２０％を超え、貴重な労働力であった。

⑫　木工場焼印作業

スケッチ帖No.１４７の木工場

動員学校　金川中学（当時）
60.0㎝×81.0㎝
昭和１９年夏　油彩キャンバス
JMUアムテック蔵

播磨造船所内の南にあった木工場において焼き印作業を行っている。服装は夏姿であり、金川中学の入社年月日（昭和１９年７月１８日）からすると、昭和１９年の夏頃に描かれたと考えられる。当時、船舶に装備する木製の椅子、机、寝台等は全て造船所内で製作しており、木工場も重要な仕事場所であった。

校章の学校名判明

JMU アムテック所蔵の絵画には、「博」の署名の上部に校章が描かれているものも何点かあった。この校章を基にして調べた結果、描かれている学徒の動員学校名が判った。ただ展覧会までにネット等で調べてもどうしても判らなかったのがこの絵の校章だった。展覧会後再度ネットで調べたところ、児童文学作家坪田譲治の出身校、岡山県旧制金川中学での恩師に「臥龍山の玉松城にちなんで松葉菱に巴玉の同校の校章を考案した人」がいたとの研究者の記述を見つけた。存続校である岡山県立岡山御津高校に連絡し尋ねたところ、当時の校旗の写真があり絵画上の校章と同じであった。

なお現在までに動員学校にて発見・確認された３枚の寄贈絵画では、姫路中学と金光中学の絵には校章が描かれており、日の本高女には描かれておらず、吉田博の校章作画有無の意図は不明である。

金川中学

校旗の写真

他の校章

姫路工業

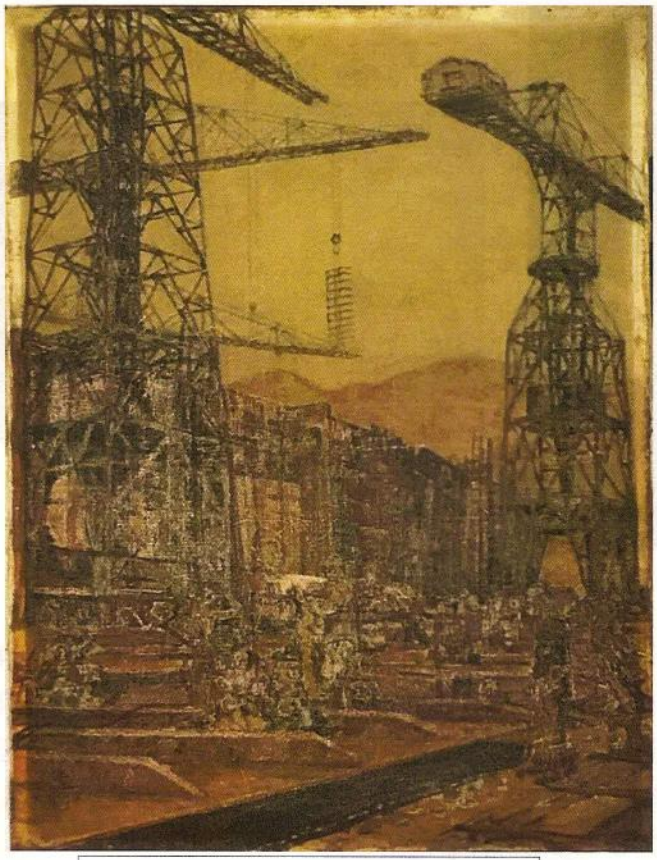
相生国民学校高等科

（寄贈絵画の校章）

姫路中学

金光中学

⑬ 第２船台建造風景



81.0 ㎝×60.0 ㎝
昭和１９年　油彩キャンバス
ＩＨＩ相生事業所蔵

スケッチ帖 No.149

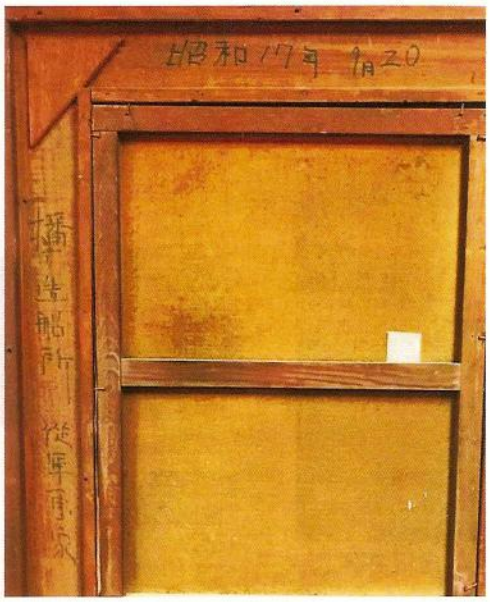
この絵画は、保存状態が悪くて傷みが酷く判然としないが、スケッチ帖 No.１４９に動員学徒たちのスケッチと混在しており、吉田博の第２期来訪時（昭和１９年）の絵画と判別した。人物は学徒か否かは不明。建造中の船は第２船台（後の第１船台）の油槽船である。

額裏の書き込みとの矛盾点

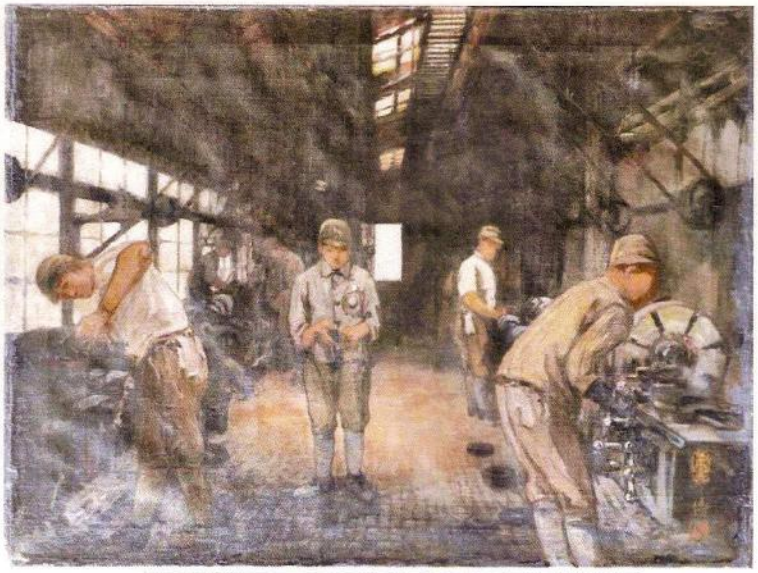
本絵画の額縁の裏側に**「昭和１７年９月２０　播磨造船所従軍画家」**との記入があり、これに拠れば本絵画は吉田博の第１期来訪時の作となり、上記の解釈と合わない。

ただし、記載の文字は青のマジックインキで書かれており、マジックインキは昭和 28 年（1953 年）頃の発売で、戦後の倉庫の整理時に記入したものと解釈し、スケッチ帖の情報を優先した。

「昭和１７年９月２０」の記入は吉田博が陸軍の紹介で初めて播磨造船所を訪問した月日と判断した。その後、吉田博はしばしば来所して増産に励む造船所の姿を描き、その集大成が「油槽船建造」となったものと思われる。



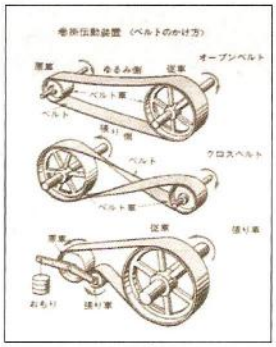
⑭ 機械工場旋盤作業



動員学校　姫路工業（当時）
60.0 ㎝×81.0 ㎝
昭和１９年夏～秋　油彩キャンバス
JMU アムテック蔵

スケッチ帖 No.１４７

校章

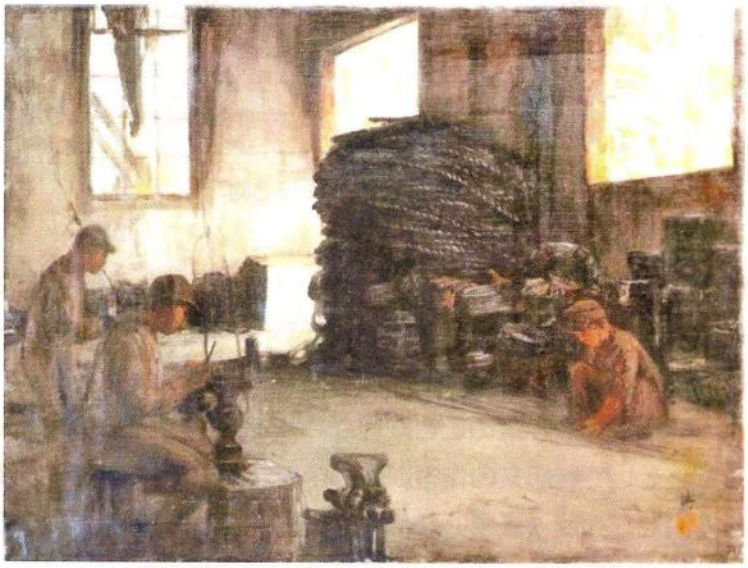


ベルト伝達図

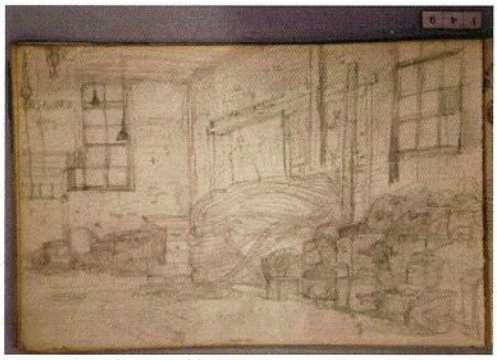
機械工場で旋盤作業をしている学徒を描いている。校章から姫路工業（現　兵庫県立姫路工業高等学校）の学徒であり、旋盤作業は慣れていたと判断できる。スケッチ帖 No.１４７に下絵がある。

当時の旋盤等の回転式工作機械は一つのモーターで主軸を駆動し、この主軸からそれぞれにベルト伝達により駆動する方式で、吉田博はこの構造を克明に描いている。なお工作機械が機械それぞれのモーター駆動方式になったのは、昭和３５年(１９６０年)頃であった。

⑮ ワイヤー先端処理作業



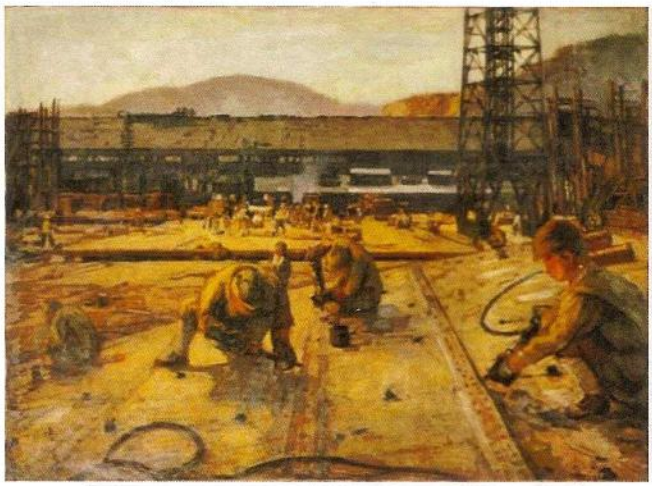
60.0 ㎝×81.0 ㎝
昭和１９年夏～秋　油彩キャンバス
JMU アムテック蔵



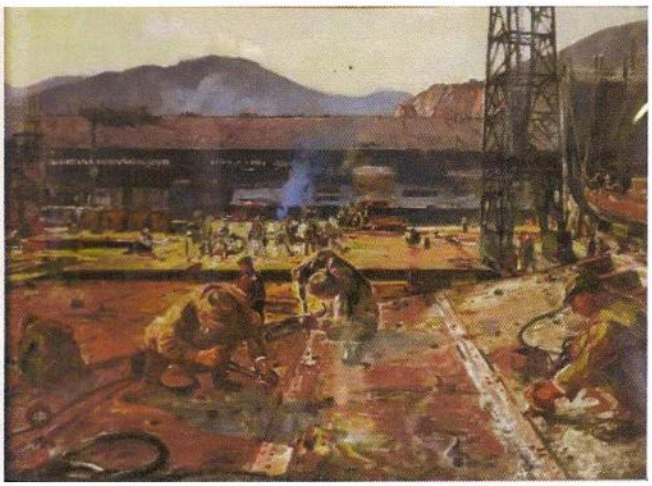
スケッチ帖 No.１４９

船で使う鋼製のワイヤーの先端を編み込んでいる作業を描いている。校章は描かれておらず学徒か不明である。
スケッチ帖 No.１４９に下絵が残っている。

⑯-a、⑯-b　組立場コーキング作業

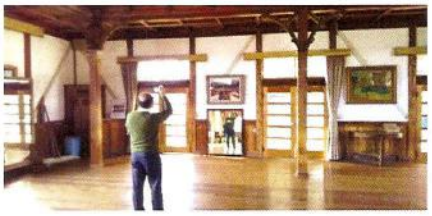


動員学校　金光中学（当時）
60.0 ㎝×81.0 ㎝
昭和 19 年秋～冬　油彩キャンバス
JMU アムテック蔵



動員学校　金光中学（当時）
66.0 ㎝×85.0 ㎝
昭和 19 年秋～冬　油彩キャンバス
金光学園蔵

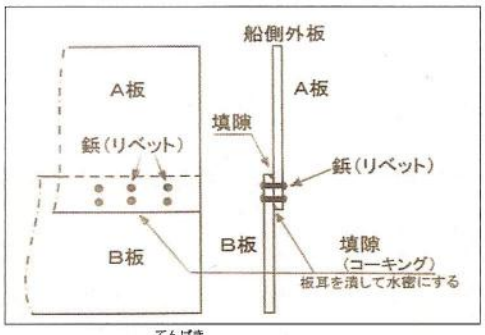
背景のある大きな建物は鉄器工場。背後に鷲ノ巣山が見え、第6船台南側屋外での外板（船の外側の鋼板）の填隙（てんげき）作業の様子である。動員学徒がエアホースの先のニューマチックエアハンマーを持ち作業している。服装や遠くに立ち上る煙から昭和 19 年(1944 年) から 20 年にかけての冬の時期と推定できる。この時期戦局も悪化し生産性は良くなかったと想像するが、学徒たちが一所懸命に作業している様子がみえる。



金光学園　記念講堂

校章

填隙（てんげき）とはコーキングとも言い、鋲（びょう）（リベット）で接合した板の端部をエアハンマーで潰して水密性を保つ重要な作業であり熟練を要する。素人の学徒が填隙したような船は、水がジャジャ漏れであったろうかと想像する。



填隙（てんげき）の図

学徒の事、寄贈絵の事

展覧会の準備段階で、播磨造船所に動員された学徒の情報を集めるためインターネットで検索した。岡山県矢掛高等学校（当時は矢掛中学）のホームページに学徒動員の記録があり、直接高校に連絡を取ったところ、昭和 47 年(1972 年) 発行の創立 70 周年記念誌に一卒業生の雑感文（次ページ）があることが分った。そこには絵に描かれている道具や作業のことが書かれており、当初この絵が矢掛中学の学徒を描いたものであると推定した。そして雑感文の作者が絵の中に居るのではと想像し連絡を取ったところ、本人は既に亡くなられていたが家族（長男）から「学徒動員の事は漠然と聞いていたが播磨造船所だったとは知らなかった。雑感文中の男児が自分であろう」と連絡があった。

なお展覧会後「吉田博は各関係学校へ寄贈した」との記録に基づいて兵庫県立美術館が調査したところ、同じ構図の絵が岡山県金光学園（当時は金光中学）に有り、記念講堂に大切に掲示されていた。

矢中在学雑感

昭和二十年卒　（三宅）

昭和十六年四月若き希望をもって矢掛中学校に入学しました。当時は臨戦体勢、戦時色一色で、戦闘帽、ゲートル、毎朝校長先生の朝礼の訓示も一億一心、勝つ迄は、等々勇ましいものでした。

一年生、二年生、三年生と、或は田植、稲刈、或は開墾と、授業の間に勤労奉仕、一段と感慨深い思い出があります。

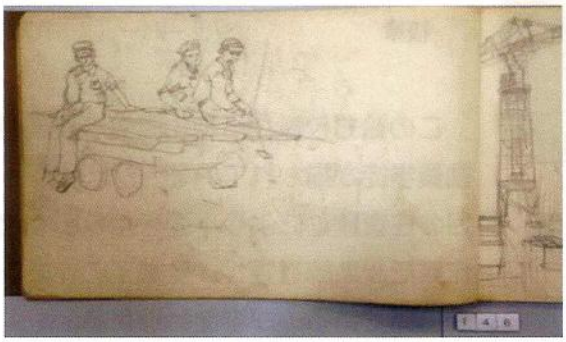
昭和十九年六月頃だったと思いますが兎に角暑い暑い日でした。当時四年生であった小生達同級生一同は、兵庫県相生市の播磨造船所に学徒動員で勇躍出動しました。田舎出の小生達は、興亜寮の名の大きな寮にびっくり、今迄各家庭で生活したものが一ケ所に寝食を共にし所謂一つ釜のめしを喰い合う仲となり、思い出も又一しおと思います。入寮後直ちに各職場に配置になるのです。職名がずらりと並んでその中より希望の職種を選ぶ様に指示されましたが、小生は、オッチョコチョイの方でしたので填隙とはどんな事をするのかも知らず、填隙とはチョイと勇ましい名前で恰好が良い位に軽い気持ちで職種を選ぶのに填隙と云って了い希望?が入れられ、配置されてビックリ、エヤーホース、ニューマチックのエヤハンマー等一揃いの動具を貸与され作業に掛り、その疲労たるやグッタリで、此のとき僅か十六才でした。でも段々と要領が良くなると共に、疲労の度数も下りましたが勿論作業能率の方も下がり、当時の播磨造船所の班長にお目玉を度々頂きました。その当時オランダの捕虜も一緒に仕事をして居て船台の蔭でよくサボって居りました。

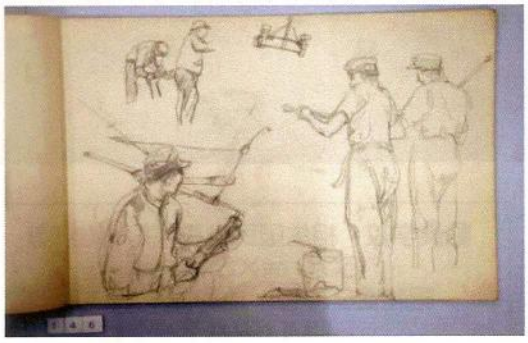
寮生活中に遂にタバコの味を憶えて、タバコの調達に何かと考えて種々の闇取引を知り、当時は珍らしい外国タバコを捕虜に食料と交換して憲兵に見付かり、つかまる前にタバコを捨てて逃げたり、今思えば冷汗の出る様な思い出が沢山あります。

学徒動員で同伴された先生方も大変苦労なさった事と思います。何分にもヤンチャ盛りの生徒です。夕方帰寮して就寝時間迄勉強は殆どせず騒ぐばかり。ア、思い出は相生の山の彼方に、小生達は若さの面白い経験はなくとも皆んな協力して一つ釜のめしを喰い合った、その事だけで充分だといつも慰めております。

今三児の父として戦時中の話をして、小生が学徒動員に出動したときと同年令の男児に笑われて居りますが、人生経験の一つであると、別に悔にも思って居りません。興亜寮に出動した人達とゆっくりと今一度話し合う機会が近き将来に来る事を願いつゝ……。

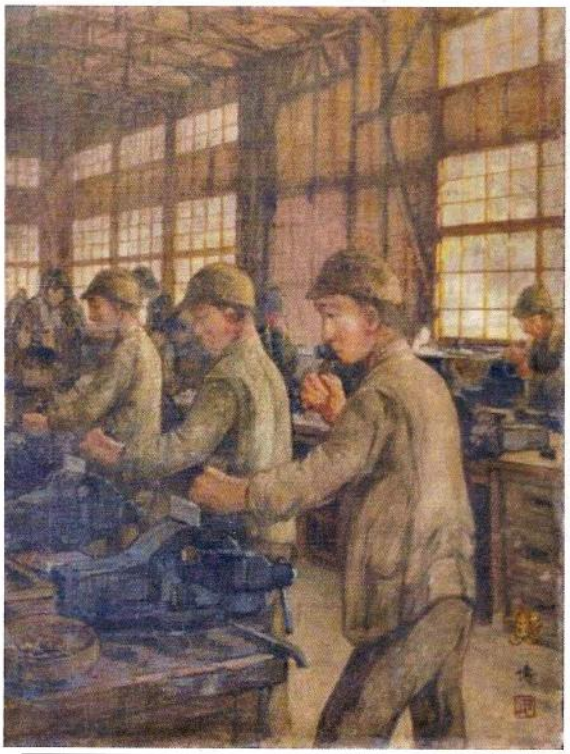
滋賀県甲賀郡 在住





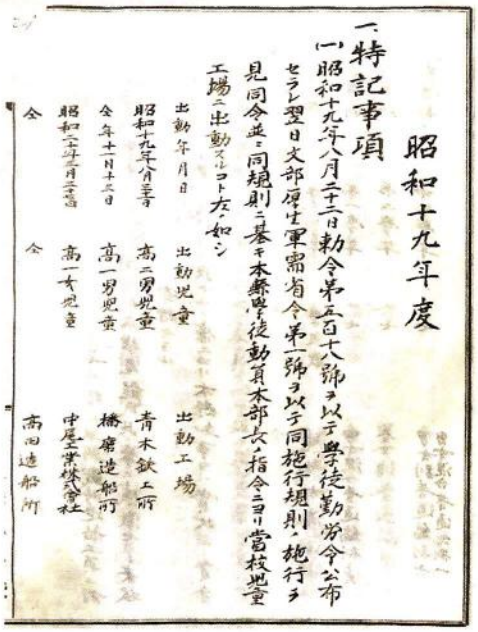
吉田博のスケッチ帖No.146に描かれている捕虜と思われる人物

⑰ ハンマー・タガネ基礎訓練



動員学校　相生国民学校高等科(当時)
81.0 ㎝×60.0 ㎝
昭和１９年 11 月頃　油彩キャンバス
JMU アムテック蔵

校章



昭和十九年度

一、特記事項

(一)昭和十九年八月二十二日勅令第二百六號ヲ以テ學徒勤労令公布セラレ翌日文部厚生軍需省令第一號ヲ以テ同施行規則ノ施行ヲ見同令並ニ同規則ニ基キ本縣内ノ学徒動員本部長ノ指令ニヨリ當校児童工場ニ出動スルコトヤウ知シ

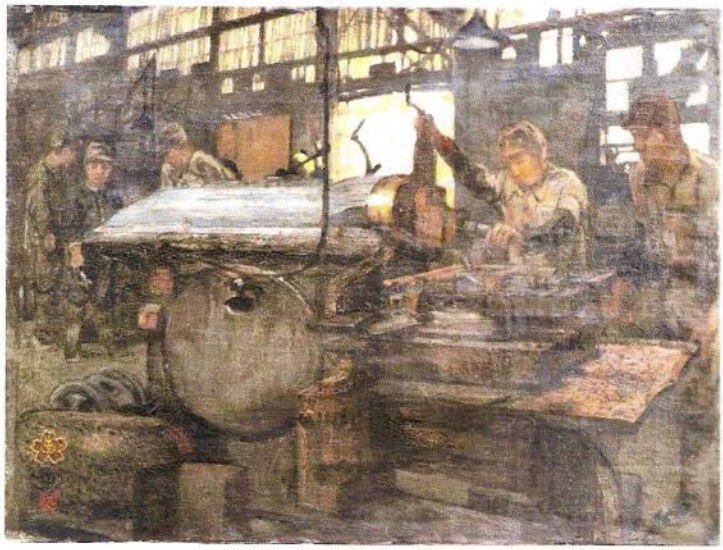
出動年月日　出動児童　出動工場
昭和十九年八月三十　高二男児童　青木鉄工所
仝年十一月十二日　高一男児童　播磨造船所
昭和二十年三月二十日　高一女児童　中屋紙業株式會社
仝　仝　高田造船所

校章　　学徒勤労令公布(相生小学校沿革史より)

造船所地元の相生市では国民学校高等科生徒(１３～１５歳)も学徒動員され、記録によれば昭和１９年（１９４４年）１１月から高等科１年生が播磨造船所へ動員されている。

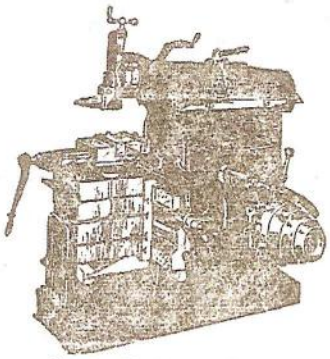
動員された学徒にはまず始めにハンマーとタガネを使った基礎訓練が行われ、この絵はその様子を描いたものである。

⑱ シェーパー加工作業



動員学校　相生国民学校高等科(当時)
60.0 ㎝×81.0 ㎝
昭和 20 年春　油彩キャンバス
JMU アムテック蔵

校章



Shaping Machine or Shaper

シェーパー（型削り盤）

この絵も校章から相生国民学校高等科の動員学徒が描かれている。シェーパー（切削刃の往復運動により平面を削り出す機械）作業だが熟練を要し、熟練工の作業を後ろから見ているのが学徒と思える。

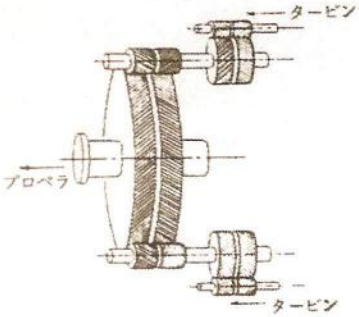
⑲　タービン減速機組立作業

81.0 ㎝×60.0 ㎝
制作年不明　油彩キャンバス
㈱JMU アムテック蔵

作業場所は船の機関室内、中央の灯りは作業灯か、熟練を要する作業で学徒ではないと思われる。

タービン減速機

石油の供給逼迫の戦時下、船舶の推進装置は石炭炊ボイラーと蒸気タービンの組合せが主流であった。
タービンの回転数(約５０００回転／分)をプロペラの回転数(約１００回転／分)に減速する為の歯車装置。

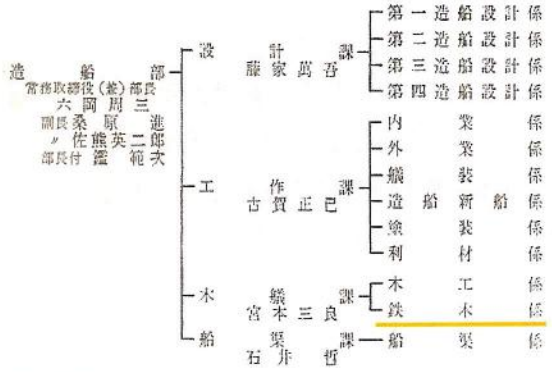


減速装置の一例

⑳　進水五百（流田職長像）

37.5cm x 27.5cm
昭和 20 年春頃
鉛筆画用紙　個人蔵

展覧会来場者から、自宅に吉田画伯による父の絵があると聞き、展覧会終了後に見させていただき、鉄木(てつもく)係の流田職長の肖像であることが判った。**鉄木(てつもく)係** (Shipwrighter)は、船体の建付け（組み立て）や進水作業を担当する役目であるが、木材を扱う作業も多く、当時の組織図(下図)によれば木艤課に所属している。木艤課の宮本課長は、各船の進水記念絵葉書の下絵を描いた絵心のある人物で、相生滞在中の吉田博を担当し、その部下で老練な流田職長が建造現場での作画位置の設定や現場との折衝など吉田博の面倒を見たのではないかと推察する。「進水五百」の題名は、進水作業の達人という意味であろう。



昭和 20 年 4 月造船部組織図

㉑　やすり仕上げの女学生

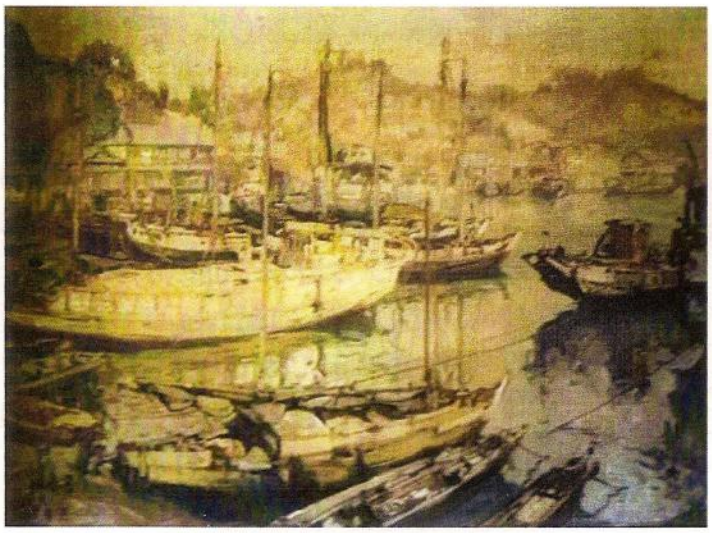
動員学校　上郡高女（当時）
60.0 ㎝×81.0 ㎝
昭和 20 年４月～5月
油彩 キャンバス
㈱JMU アムテック蔵

電気の遮断器に用いられる絶縁体部品のやすり仕上げ作業を、動員学徒の女学生が播磨造船所構内の山側にあった作業場で行っている風景。
作業をしているのは上郡高女(現兵庫県立上郡高等学校)の女学生で、昭和 19 年（１９４４年）７月に動員学徒として播磨造船所に派遣され、終戦まで働いた。
窓から見える裏山には、ミツバツツジが咲き、作業台の上に飾られていることから、制作時期は昭和 20 年(１９４５年)４月から５月頃と推定される。このミツバツツジは今でも JMU アムテックの裏山に自生しており春には花をつけ私たちの目を楽しませてくれる。
二条の白線が入っているセーラー服は上郡高女の制服と確認した。一部は私服の生徒もいる。
この絵を最後として吉田博は相生を離れたと思われる。

ミツバツツジはツツジ科ツツジ属の落葉低木。 関東地方から近畿地方東部の太平洋側に分布し、主にやせた尾根や岩場、里山の雑木林などに生育する。4-5月頃に咲く紅紫色の花が美しい。

吉田博のスケッチ帖 No.149 より
やすり仕上げをする女学生

㉒ 家島 真浦港風景



家島町真浦港　現在風景

60.0cm×80.0cm
昭和19年秋～冬
油彩キャンパス　　個人蔵

展覧会に来場された姫路市家島町真浦のＡ氏から「自宅に吉田画伯作の風景画がある。少年時代に真浦港でマントを着て絵を描いている画家を見た記憶がある」との情報を得て取材に赴いた。
自宅にはいくらか傷んでいるが「博」の署名と落款がある油彩画があり、絵画の遠景は現在の風景と一致した。またスケッチ帖No.１４９に残る港湾風景も当時の真浦港の風景であると確認できた。

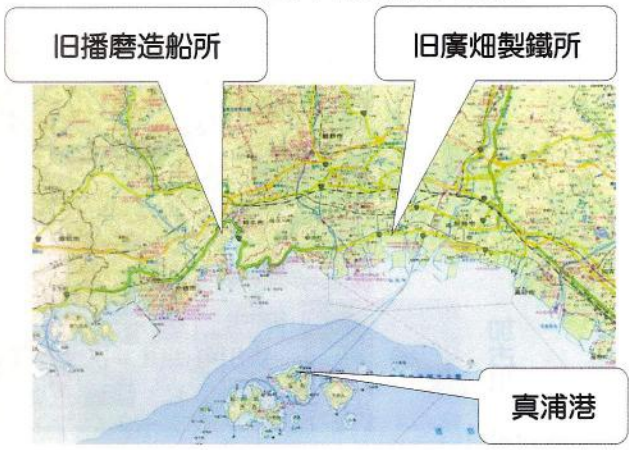
戦時中、家島は相生からランチ（機艇）で４０分程度の場所に在り（下地図参照）、真浦港には木造機帆船建造の小造船所が多くあった。当時は政府の指導で協同組合を形成して、戦時標準木造機帆船の量産に励んでおり播磨造船所の関連工事もあったかと思われる。

吉田博は昭和１９年(１９４４年)夏から２０年春にかけて相生に滞在し生産現場の絵画を精力的に描いていたが、時には会社の機艇を利用して家島に渡り、得意の風景画を描いたものと思われる。家島滞在中は絵画の左端の大きな家(家島船渠社長宅)に泊まったらしい。

Ａ氏の祖父は船大工であったが、如何なる経緯で此の絵画を入手されたのかは不明である。家島には更に２～３点の吉田博の絵画があると聞いたとの事だが、現在では所在は不明である。

スケッチ帖を説明するＡ氏

スケッチ帖No.１４９



瀬戸内海家島諸島・西播磨地域

㉓ 水 辺 の 吉 川

69.3cm x 41.7cm
昭和２０年初頭
油彩　キャンバス　個人蔵

吉川の謎（“よしかわ” か “よかわ” か？）

展覧会開催に際して、当時の播磨造船所幹部の家族から提供された絵画であるが、全く同様な構図の版画「吉川」（昭和１０年）があるので（場所は特定されていない）、吉田亜世美氏と相談し**「水辺の吉川」**の題名にした。

一方、スケッチ帖 No. ７５に、造船所や学徒に混じって、全く同様の構図が存在し、昭和２０年（１９４５年）初頭のスケッチかと思われる。

スケッチ帖 No.75

兵庫県の吉川（よかわ）

加古川市を河口とする加古川の支流美囊川の水域である、兵庫県三木市吉川（よかわ）町（旧美囊郡吉川町）は多くの溜池や水辺もある里である（下地図参照）。

吉田博は、以前に吉川を訪れてスケッチし、版画として公表していたと思われる。

吉川再訪の仮説

昭和１９年～２０年にかけて相生に長期滞在していた吉田博は、世話になっている造船所幹部に絵画提供の必要性を感じ、吉川を再訪してスケッチして油彩画に仕上げて贈呈したのではないか？
本絵画のサインは戦前の様式ではなく、勤労動員学徒を描いた絵画と同種のサインである。

当時の吉川は交通不便な地で、吉田博が加古川の陸軍飛行場を訪れた機会に、陸軍の車輌を利用したとも考えられる。

加古川に至る

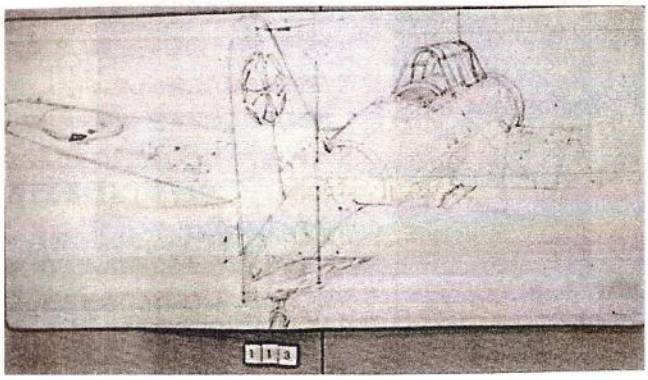
兵庫県吉川町　周辺地図(昭文社三木・小野市地図より出典)

九九式襲撃機

吉田博のスケッチ帖No.１１３に陸軍九九式襲撃機のスケッチが数葉ある。尾翼の部隊マークは茨城県鉾田の教導飛行師団のマークらしい。

襲撃機とは地上の敵戦車や砲兵陣地等を低空飛行しつつ襲撃する機種で、九九式襲撃機は三菱重工製、固定脚、複座、武装は機銃と小型爆弾数個（総搭載量２００kg)で、昭和１５年から正式採用された。

九九式襲撃機



スケッチ帖No.113

小回りが利いて操縦し易い九九式襲撃機（上図）は、本来の襲撃目的以外にも、偵察用や高等訓練用にも多用された。戦争末期には２５０kgや５００kgの大型爆弾を抱いて、敵の艦船に対する特別攻撃（体当たり攻撃）にも使用された。

加古川陸軍飛行場と飛行第６６戦隊

兵庫県加古川市尾上町に立地した加古川陸軍飛行場は航空工廠の分廠も併設し、日本各地から大陸や南方の戦線に向かう陸軍飛行隊は加古川を中継して整備をした後に、目的地に向かう場合が多かった。

昭和１９年（１９４４年）７月からのルソン島での激戦で大損害を受けた陸軍飛行第６６戦隊（九九式襲撃機で編成）は、昭和２０年２月に茨城県の鉾田基地へ移動して再編成を行った後、３月中旬に加古川飛行場を経由して、九州の太刀洗飛行場や万世飛行場等に移動し、沖縄方面の戦闘に参加した。

九九式襲撃機の飛行戦隊は２７～３６機で編成されたが、機材や人員の不足に悩む軍は、６６戦隊の再編に際して鉾田教導飛行師団所属の同型機も編入した可能性が高い。この頃、陸軍の派遣画家として播磨造船所にて動員学徒を描いていた吉田博が加古川陸軍飛行場を訪れて、鉾田の部隊マークを記した九九式襲撃機に遭遇する機会があったのではないかと想像される。吉田博の筆はかなり正確に飛行機の姿を捉えており、飛行機に搭乗して描いた様なスケッチもある。

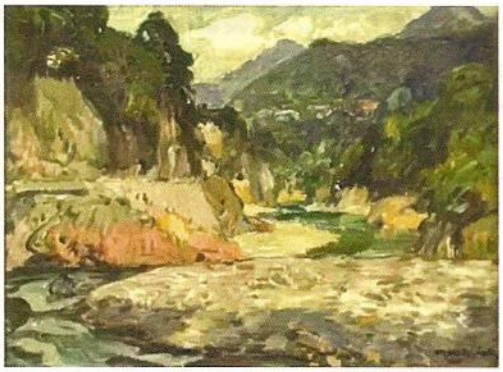
加古川陸軍飛行場

戦争末期には吉川の近傍の三木にも新設の陸軍飛行場があり、吉田博が陸軍の便で吉川を訪れる事は容易であったであろう。

以上が「水辺の吉川」に関する我々の仮説であるが、吉田が以前に描いたスケッチを記憶を辿って再現したり、以前のスケッチ帖からコピーした可能性もある、九九式襲撃機に就いても、昭和１７年頃の関東の軍需工場のスケッチ旅行の際に、鉾田飛行場を訪れた可能性も残っている。

第５章　吉田博の風景画

㉔ 渓 谷



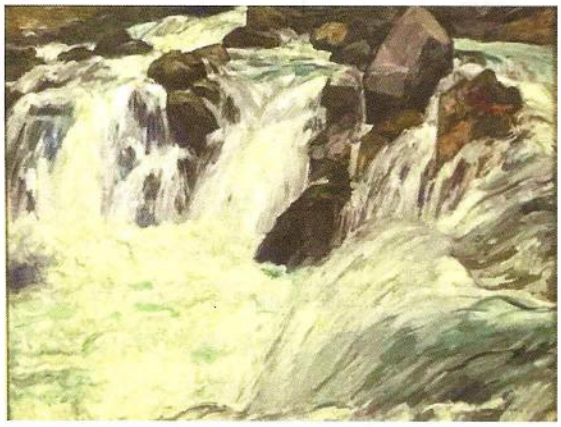
33.5 ㎝×45.5 ㎝
昭和 11 年頃　　油彩キャンバス
個人蔵

明治以来の画壇の主流に属さなかった吉田博を、知る人も少ない相生での展覧会で「風景画の巨匠」として紹介するのに苦心した。

当時の播磨造船所幹部の家族から、吉田博の所有絵画を展示作品として提供の申し入れがあり、風景画４点(前章の㉓「水辺の吉川」含む)を同時に展示することが出来たのは幸いであった。

相生滞在時に吉田博が寄贈したか売却したかは不明であるが、４点の絵画は無題であったため、吉田亜世美氏と相談して題名を決めて展示した。

㉕ 奔 流



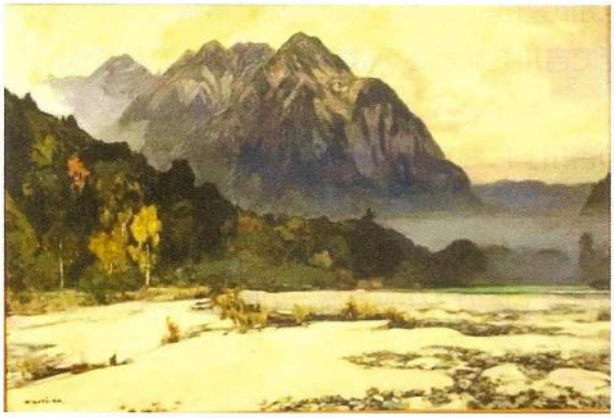
60.5 ㎝× 80.0 ㎝
昭和 11 年頃　　油彩キャンバス
個人蔵

㉔「渓谷」は明治 43 年（１９１０年）の文展出品の油彩画「渓流」（利根川上流）と関連があるのではと思われる。

㉕「奔流」は昭和 11 年(１９３６年)の文展出品の油彩画「奔流」に類似している。

㉖「雨後の穂高山」は昭和６年(１９３１年)発行の自著「高山の美を語る」に収められている絵「雨後の穂高山」と同じ構図である。

㉖ 雨後の穂高山



60.5 ㎝× 90.5 ㎝
昭和２年頃　　油彩キャンバス
個人蔵

吉田博は大正時代、登山黎明期の日本アルプス等へ毎年登山をしており「画を描くために山へ登る」本格的登山画家で、「日本アルプス十二題」、「富士拾景」など多くの山や渓谷の絵を残している。

このような風景画家が、造船所の建造船や働く人々や勤労学徒に、別の新たな関心や興味をよせ、多くの絵を残したことは想像に難くありません。

あとがき

今回の吉田博展に関連して収集できた吉田博の遺作やスケッチ帖の調査から得た我々の結論は、一部の仮説を交えて、「戦時下の吉田博の足跡」（６頁参照）に述べた。その根拠となる各絵画の作画時期や作画場所の特定に注力したが、吉田博のスケッチ帖には番号が打たれているが年代順ではなく作画時期も不明な為に、我々の結論は、かなりの推論を含むものとなった。

外国生活が長かった吉田博は、その反作用としてか愛国心も強かったと思われ、他の画家に率先して陸軍従軍画家として戦場に赴いて、多くの油彩画やスケッチを残した。更に太平洋戦争勃発後は、従来の花鳥風月の風景画や版画を離れて、軍需工場で増産に励む労働者や動員学徒を真摯に描いた。一国民として当然の義務と思っていたのであろう。画家として、戦場と生産現場に共通する飛行機やクレーン等のメカニズム、躍動する兵士や作業員の人物像等、従来の風景画には無い新しいモチーフに興味を持った面もあったのであろう。

今回、動員学徒を描いた絵画３点が動員元学校の後継高等学校で発見されたが、絵画寄贈の主体が、吉田博か、播磨造船所か、或いは陸軍省か文部省の指示であったのかは良く判らなかった。

更に吉田博個人の生活面から見れば、別居家族への心配は別として、食糧難や空襲の東京を離れて、陸軍を後ろ盾としての田舎の相生暮らしは、不快なものではなかったであろう。造船会社幹部や現場の人達との関係も良好で、気晴らしに家島や吉川に赴いて風景画を描く自由もあった様だ。

２週間弱の相生での吉田博展の開催期間中には、多くの造船所ＯＢ達や動員学校の老卒業生達が来館されて会場を賑わした。もう１０年早く開催出来ていたら、吉田博の足跡に迫る、より多くの事実も集まった筈で関係者としては残念であるが、過去に手が届く瀬戸際のタイミングであったと思う。

本件に関連して当時の動員学徒の手記に接する機会に恵まれた。各学校のスクール・カラーもあり様々であるが、概して、青春時代の一挿話としての明るい雰囲気の回想が多く、受入側の播磨造船所の関係者としては、いささかの安堵感を覚えた次第である。約４０００名の学徒の中には業務上の負傷者や空襲による犠牲者もあった様で、逆境の中で作業に励んだ動員学徒達、その姿を真摯に描いた吉田博画伯に我々のオマージュ・敬意を捧げる次第であります。

吉田博展実行委員会

謝　辞

相生吉田博展の開催、またその後の本誌発行に際しまして吉田亜世美様並びに吉田家の方々を始めとして数多くの方々および団体に大変お世話になりました。謹んで御礼申し上げます。（敬称略）

- 吉田亜世美
- 吉田明浩
- 安永幸一
- 舟丘恵凡
- 兵庫県立美術館
- 神戸新聞社
- 兵庫県立姫路西高等学校
- 金光学園中学・高等学校
- 学校法人 日ノ本学園
- 相生市
- 相生市立相生小学校
- 吉田　司
- (有)吉田博トラスト
- 出原　均
- 橋本一彦
- 千葉市美術館
- 毎日新聞社
- 岡山県立岡山御津高等学校
- 岡山県立矢掛高等学校
- 日ノ本学園高等学校 同窓会
- 相生市教育委員会

上記以外にも多くの方から吉田博画伯の絵画、スケッチや情報等をご提供頂き、ここに改めて御礼申し上げます。

参考文献

生誕１４０年　吉田博展	毎日新聞社
吉田博作品集	安永幸一　（東京美術）
吉田博画文集	安永幸一監修（東京美術）
山と水の画家吉田博	安永幸一　（弦書房）
播磨造船所五十年史	播磨造船所
五十年畧史	播磨造船所
造船（ダイヤモンド産業新書）	ダイヤモンド社
戦時標準船入門	大内健二（光人社）
陸軍航空隊全史	木俣慈郎（光人社）

参　考　資　料

		頁
参考資料―1	展覧会新聞報道	37
参考資料―2	吉田博スケッチ帖の経緯と熱海訪問	40
参考資料―3	吉田博スケッチ帖	41
参考資料―4	吉田博の見た播磨造船所	51

省　略

相生『吉田博展』その後　―播磨における吉田博の足跡―

発行日	2019年3月
編集者	吉田博展実行委員会 （会長　石津康二）
発行者	株式会社 JMU アムテック・史料館 678-0041 兵庫県相生市相生 5292 番地 http://www.jmuc.co.jp/amtec/
印刷・製本	株式会社　六甲商会